

96  
7  
58

森脇  
星江  
著

禪學無一物修行

東海庵精州禪師題辭  
中舍身居士序文

東京大學館發行





自ら禪脱の士と號する者近時漸く多しその言語文字

を見れば甚だ向上にして萬里海上を隔て臨濟洞山と

手を携へて行かむとし直ちに龐老坡老を奴にせんと

するもの如し離てその平生を見るに唯た名を釣り

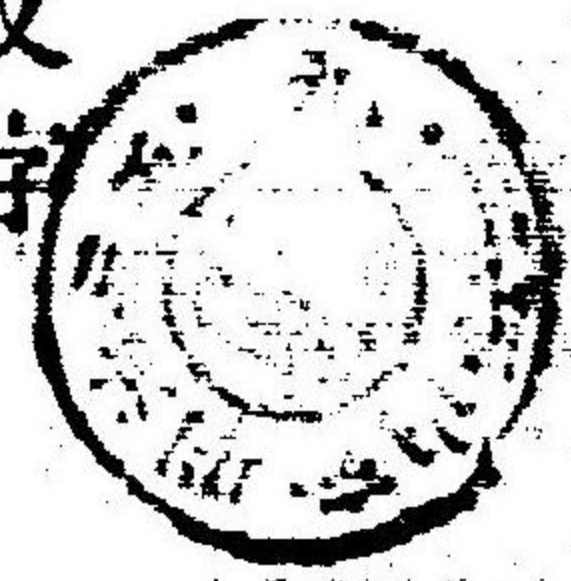
利を網し煩惱妄想の間に頭出頭没し市井の無頼兒と

擇ぶ所なし眞箇禪脱の士と云ふ者豈に此の如きもの

ならむや余常に此の輩を惡むを啻だに蛇蝎のごとき

のみならざるなり森脇君特りその撰を異にし數年來

老匠の室に入り親參實究頗る得る所あり遂にその修





得する所を記述して名けて禪宗無一物修行と云ふ余  
受けて之を讀むに頗る世人を省察せしむるに足るも  
のありて亦斯道に補をしとせず然りと雖も圓覺大師  
の道山高く水長く愈よ進めば愈よ高く愈よ入れば愈  
よ深し森脇君たる者今日の所得をもて自ら足れりと  
せず益々激勵して斯道の爲めに盡す所あらば唯に森  
脇君の幸のみならむや余切に之を囑すと云ふ

明治壬寅の秋九月 舍身居士和南

はしかき

此の書は明治二十九年より三十四年に至るの間。予  
が俗塵紛々たる活世界に出没するの傍隻脚を禪門に  
投じて。向上の一路を透過せんと試みたる。經歷談な  
り。

故に通常の禪學談にもあらず。又風流三昧の紀行文  
にもあらず。唯予が如き偏癖の個性ある漢が。如何  
に發心し。如何に修行し。如何に失敗したるか。を事  
實ありのまゝ、縷述をたる談話なるのみ。  
予が此の稿を草するや。一友曰く汝果して禪を賣ら



んとするかと。予は未だ見性得悟の人にあらず。豈  
賣るの禪あらんや。南隱禪師曰く如斯者寧ろ無きに  
若かずと。然りと雖も世或は禪的門外漢にして予と  
感を同ふし焦心するの人なきにあらざるべし。此の  
書豈半文の價值なからんや。  
惜むらくは予や多くの學殖なきが故に。文字生硬  
章句杜撰にして言文殆ど亂雜に流れ。爲に往々意の  
通せざる嫌あらんを。

されど予は可成彼の敎家に專用する所の。所謂禪語  
なるものを避け。寧ろ談話の卑俗に流るゝも。抹香

臭くならざらんことを期したり。

稿成るや託するに所なし。弊衣高屐突然として二六  
社櫻井熊太郎氏を訪ひ囑するに此の事を以てす。予  
は氏は於て一面の識なし。然も氏温顔以て予を迎へ  
朴訥眞摯。頗る原稿斡旋の勞を取られたり。驕慢癡  
愚の予も。亦氏が高俠に感ぜずんばあらず。

予は向上の英靈漢に向つて言ふにあらず。世の予と  
感を同ふし境界を同ふせらるゝの士。一讀果して如  
何の感がある。予は切に其批評を聞かんと欲するな  
り。



千寅の秋青山幽靈坂のはとりに漂母の餐をうけつゝ

星江 志 る 子

目次

- (一) 次 目
- 一、 禪學修行の發端……………一
  - 二、 禪と云ふはどんな者である……………四
  - 三、 盤山長老に禪を尋ぬ……………七
  - 四、 坐禪工夫(隻手の聲)趙州の無字……………一〇
  - 五、 天龍寺峨山和尚との問答……………一三
  - 六、 機鋒峻險なりと云ふ東岳禪師の禪は畢竟如何……………二一
  - 七、 此から愈々正式の坐禪……………二六
  - 八、 大死一番絶後に甦れ……………三四
  - 九、 禪界||實業界……………三七
  - 十、 失敗||絶望||懊惱……………四七



十一、南和に於ける工夫三昧……………五三

十二、高野僧との對戰……………五七

十三、工夫の迷—峨山禪師の返書……………六〇

十四、歩行三昧—ころく三昧……………六二

十五、決死絶食一室に籠る……………六八

十六、東海庵蜻州長老の棒喝……………七二

十七、狂三昧……………七六

十八、峨山禪師の機鋒……………八〇

十九、再び南宗寺に苦戰す……………八五

二十、殺活不自在……………八八

二十一、安國寺の法戰……………九一

二十二、盲師家と盲修行者……………九三

二十三、禪の安賣……………九八

二十四、參禪日記拔萃……………一〇〇

暗の夜に鳴かぬ鳥の聲  
禪又何の効かあらん  
小悟續出

二十五、釋宗演師の頭をなし(禪がなす)……………一〇六

コラ愚圖々々すると頭の鉢が割れるぞ

附 録

一、山梨平四郎……………一〇七

二、盤珪禪師垂示……………一一一



東京 大學館出版

木村鷹太郎著 テソク 人物養成譚 (五版) 正價 四十錢 郵税 六錢

木村鷹太郎著 孔子孟子 人物養成譚 正價 三十錢 郵税 四錢

竹内楠三著 耶蘇人物養成譚 正價 三十錢 郵税 四錢

木村鷹太郎著 王陽明人物養成譚 (近刊)

河村北溟著 深山參籠 仙術修行寄譚 正價 二十五錢 郵税 四錢

早田玄洞著 膽力修行 (再版) 正價 二十五錢 郵税 四錢

墨堤隱士著 博士苦學談 正價 二十五錢 郵税 四錢

詳細の自次は本著の末尾を見よ

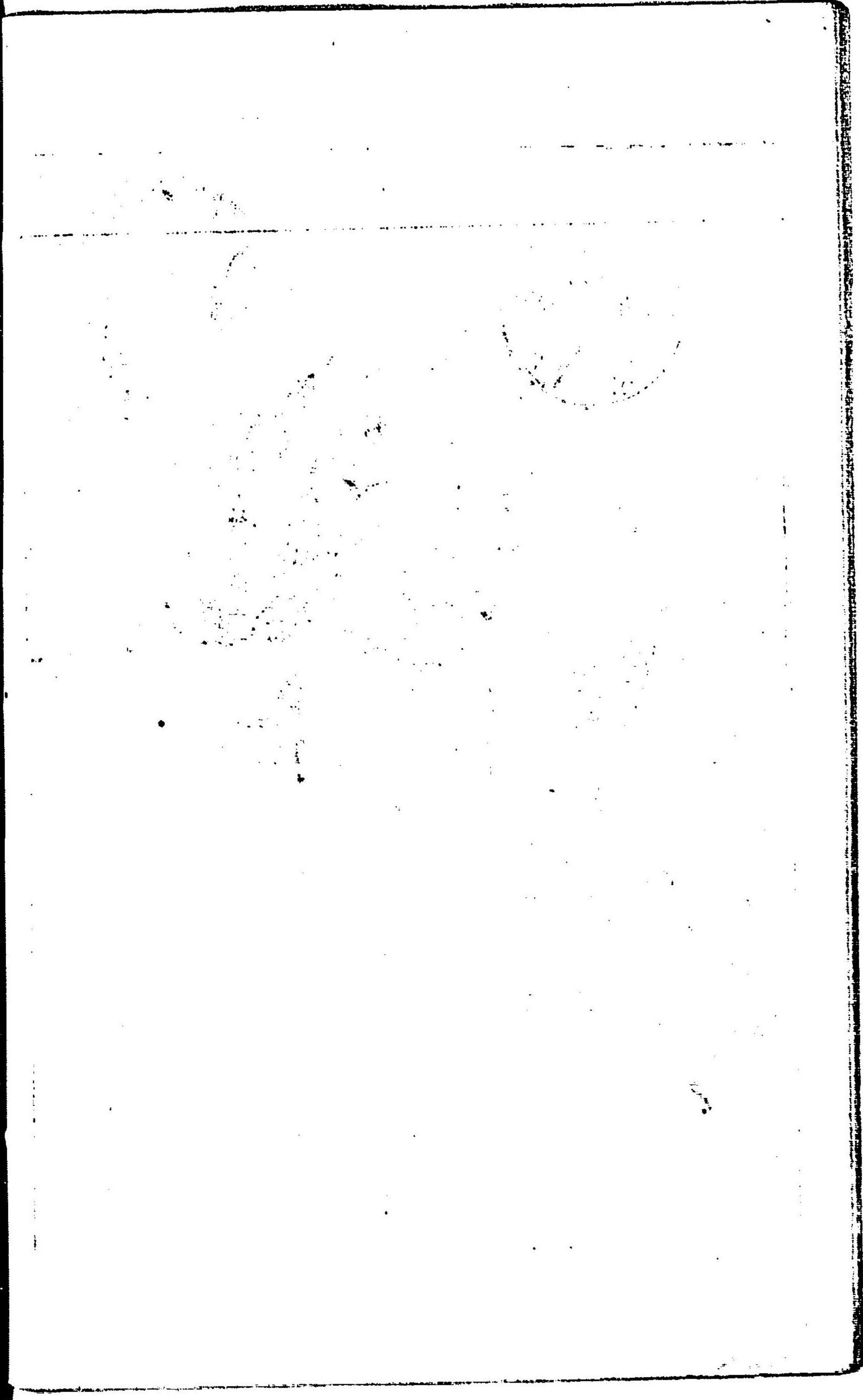




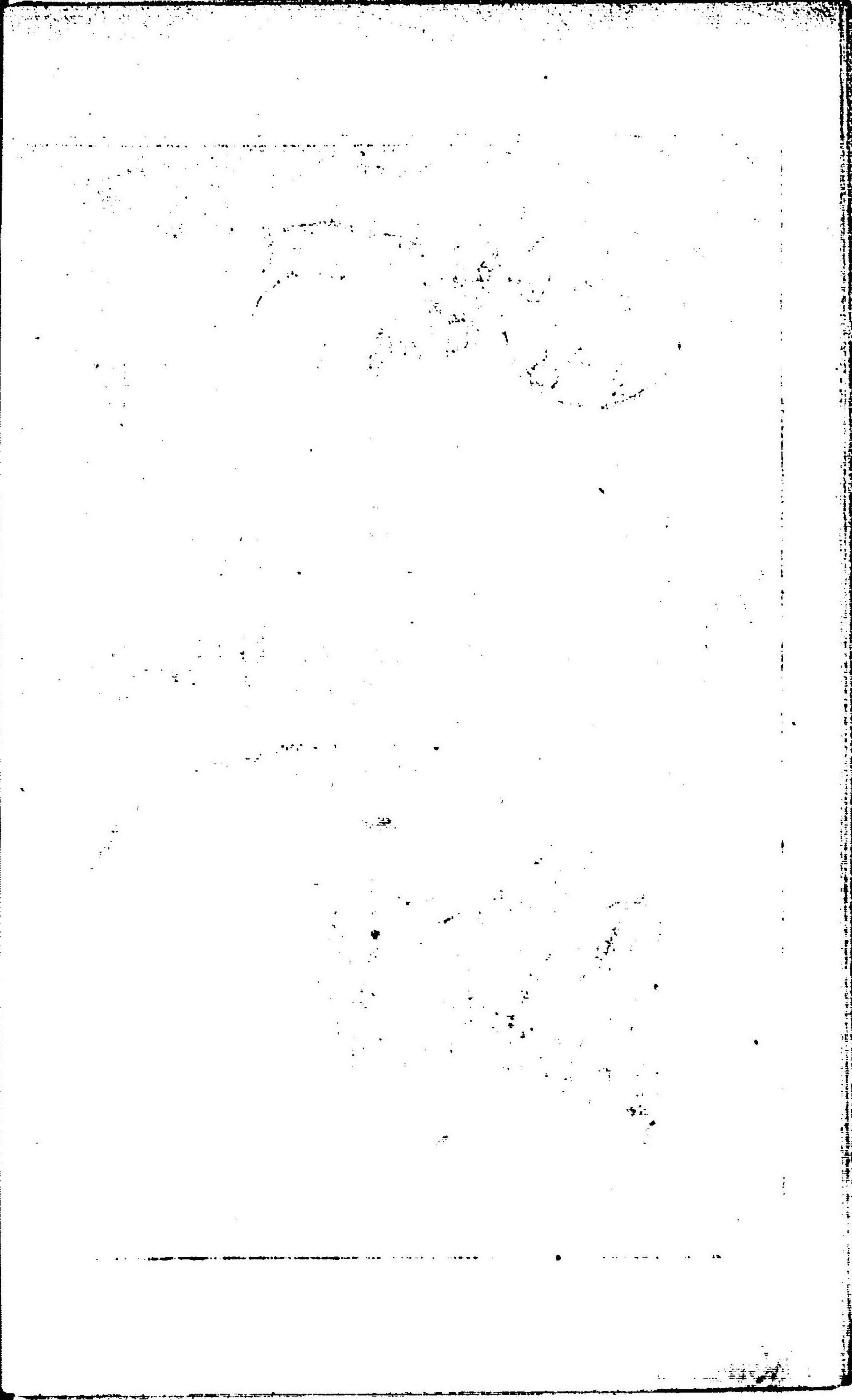
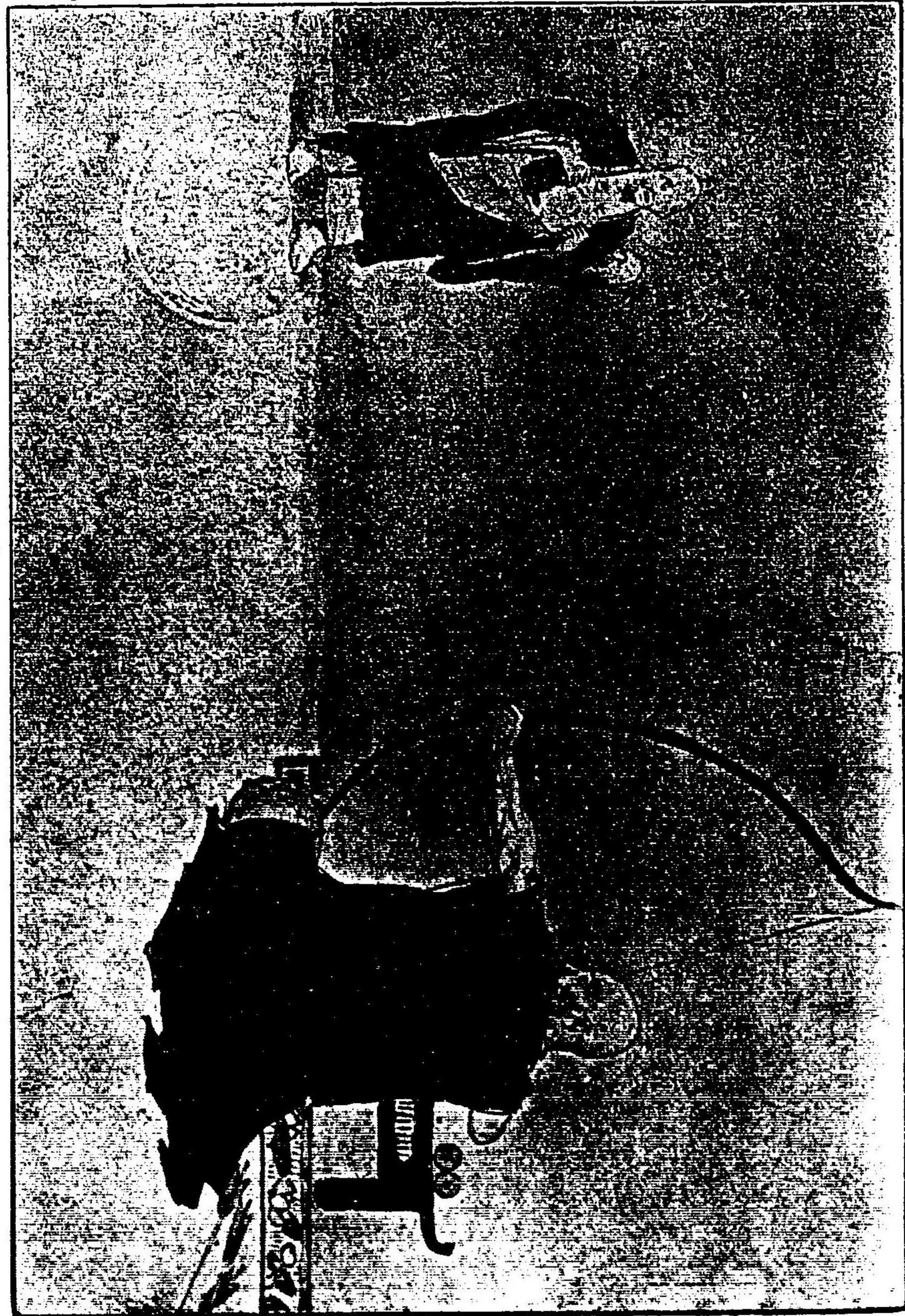
安尔心之妙也  
在尔心之妙也  
在尔心之妙也













# 禪學無二物修行

## 一 禪學修行の發端

森 脇 星 江 著

余は性來非常な多岐多血の男であつて、所謂、一飯の恩は之に償ふる事を能くせざるとも、睡眠の怨は必ず倍加して之に報ゆると云ふ様な質であつたから、十九歳、二十歳の頃から諸所を遍歴して、色々の境遇に立會つたけれども、到る處、人と衝突し、人に嫌はれ、成す事、する事、盡く失敗に歸して了つた、畢竟、是は、余が右の様な性質の結果、物事に耐ゑると云ふことが出來ず、事々物々、自ら



破壊し去つたのであらうと思はれる。幾多の失敗に係はらず中々止まない、  
けれど、余の血性と短氣は、幾多の失敗に係はらず中々止まない、  
社會の攻撃に出逢つて、益々膨脹し、激昂し、面も振らず暴進した  
から終に非常な恐る可き社會の危険の下に、突き落されたのが兩三  
回であつた。處が、余も人間である、否、小人である、故に人間の  
弱點はちやんと余の胸中に潜んで居つて、明治廿九年の秋、廿六歳  
の頃から、そろ／＼自分の性根の缺點を省る様になつて、彼の宗教  
なる者に入つたらば如何であらふと云ふ疑を起し初めた。

丁度其時大阪の近在に居て、或知人から、君其ならば、基督教に入  
つて見よと、教はつたが、突然、余が實兄、即余が實家を續ぐべき  
兄が、大阪で病死した不幸に遭遇し、終に一應歸國せねばならぬと  
思はつた。此兄の死に就ては、實に書くに忍びない慘事がある、想

ひ起す毎に、涙を禁ずる能はざる事情が潜んで居るが、併し其は、  
今茲に明にする事は出来ぬ、兎に角、此の不幸は、痛く余が獨體を  
刺撃して、其兄が臨終即丁度、十一月十八日の晩近き時、余は唯一  
人、冷なる枕頭に立つて、哀れなる兄が其一縷の呼吸を打絶つたの  
を見て、宗教心の愈人生に必要なるを感じ、國へ歸つたらば、必ず  
宗教家の門を叩いて見度いと決心した。

故國へ歸つた時の顛末は、亦書くことが出来ぬ、兎に角、余が大阪以  
來の宗教なるものは如何なる者であるとの疑は益々止まぬ、故國に  
は基督教の宣教師も教會堂もないから、兄の四十九日の吊祭が了る  
を俟つて、隣村の或る曹洞宗の寺を訪ふた、此の住職は随分學識あ  
る僧で、喜んで予を迎へ、諄々と佛教の講義を初めた、深遠なる教  
理の、一朝一夕に解る筈がない、依て一抱ぬの佛書を借りて歸宅し、



色々閱讀し初めた中、釋雲照の佛教大意、又は誰やらの因果應報論などは、稍分り易い様な、面白い様な所もあつたが、ドーモ靴を隔て、痒を搔く感があるので、余は遂に一層の奮發をして、例の哲學館の校外生となり、佛教專修科講義録を取り初めた、が唯識だの俱舍だの、中々六數くつて、獨學などでは迎も駄目だ、けれど、又他の理解し易き學科では、隨分色々の理窟を得た所もある、要するに、唯理窟を覺えた計りで、余の目的上には、寸毫の益もない、余は、元より僧侶となる望もなければ、復此佛學を修めて世に誇らふと云ふ考もないのだから、少し失望した、

## 二、禪と云ふはどんな者である

或時、二三の友人と會し、宗教談の末、一人の友が奇妙な書物だと

云ふて、無病長壽之法と云ふものを貸してくれた、是は、故の兵庫縣會議員で、神戸市某町の紳士、藤原仁右衛門氏が弱冠の頃肺病で困つた時、奥平野の祥福寺の大株和尚から、金光明最勝王經を朝夕讀誦看經すれば自然病氣も平癒するとの教を受け、其通りやつた所、案外の好果を奏し、其後壯年の頃になつて、又復、肺病が再發した許りでなく、今度は脊虫と云ふ病をも併發し、餘程の危篤に陥つて醫者も匙を措く始末の處、前同寺の住職、匡道和尚(後に妙心寺派管長)に就いて、坐禪の功徳を聽き遂に趙州無字の公案を授けられ、是を工夫すると一年、遂に大悟徹底して、病痼は消す如く逸し去り、爾來壯健無双にて、公共の事業に執筆し、六十餘歳に至つても猶饒樂しおるとの自序傳を掲げ、本文としては、白隱禪師の遠羅天釜の一なる、攝州鍋島侯の近侍に上る文が載せてあつた、余は解らぬな



がらも、此の白隠禪師の手紙を讀んで行くうちに其文の雄健豪邁で、眞に大丈夫の面目を具へ居るのみならず、何か、甚深微妙の眞理を含蓄するかの様に感ぜられたのである。此時からして、余は聊か禪門に疑を懸け、其後右の曹洞寺を訪問した時、色々質問した、住職は微笑として笑ひ、成程貴殿が、雜誌書籍を閲讀せられたなら、幾分か理窟を知つて、朋友などに大法螺を吐かるゝには宜しからんも、眞の大安心を得、一世に超脱するの力量を得られんとは六ヶ敷しい、併し佛書を見て随分人間が圓滑になるものなれば、強ち悪い事ではあるまいと、揶揄的の口調を以て説き始めた、余は此僧は學僧で、眞の禪僧でないとのことを聞いて居るから、常の如く法問をして歸つた、

又或時、友人の宅で一の眞宗派の僧に會合したことがある、此の僧

中を辯舌が達者で、縦横に教理を布演し、最後禪蓮の事に及吹、勝海舟が虎列拉病に侵された時、自ら禪定によつて之を退治して可つた云々と、吹聴したのを聽いて、余はまさか其んとはあるまいと思つたが、其後或信すべき書に明に記載してあつたを見て、愈疑を起し、禪と云ふものを伺つて見度いと志す様になつた。

### 三、盤山長老に禪を尋ね

處が、良い師家がない、即ち大悟徹底した善智識と云ふものがない、斯う思つて居る内、予が實父の圓基の對手として、一人の禪僧が見えたので、其僧に就いて、何處かに禪道の明僧はあるまいかと尋ねた、すると濱田の近在の安國寺に、盤山長老といふ人が居るが、此は東福寺派中では先づ明僧で、學識は無いが、禪の事に付ては、石



見國の中では、其右に出づる者はあるまいとの答へであつたので其れなれば、其こそ、予が禪を尋ねべき人物であると思ひ立つた。時は恰も、八月上旬、陰曆中元の暮方、予は一の友人と連れ立つて、右の安國寺を訪問して、盤山長老と云ふは、六十餘歳の老僧で、其の便々たる腹を落ち着け、炯々たる眼瞳を据え居る所、如何にも尋常ならぬ老漢であると思はれた。先づ、余の來意を聽き了つて、宜し々と、軽く頷つき、劈頭、先づ予等二人を捉え「即今、お前さん方の後から、不意に大刀を揮つて、首を斬り落した時は如何するぞ」と、突然な質問に、予は平然として、其は致方がないから、死ぬる迄の事ですとやつた。長老は微笑して「そんな事ではツマらぬ」と鼻を巻めかし、更に「其ならば、此天地に、全く一物もない」と云ふ時は如何とや」と是意々奇妙なる間に、予は再び、其は何に尋

無いので、如何の斯うのと云ふとはないと、答へた。長老、復又首を振り其んな事では、未だ々々禪理を語るに足らない、依て一則の考案を授けやるに、今度は兩手を突出し、ちいと拍手して「サア何と云ふた」予、危みながら、「バチと音がした迄です」と答へると、長老、「よし、それなれば」と、再び、隻手を突き出し「うたぬ隻手の音聲は如何とや、此は白隠禪師以來、幾多の學人を惱ました公案で、容易ならぬ者であるから、歸宅の上、端座工夫して、若し發明する事が出来たら、直に予が室に來つて所見を呈して見ろ」と説かれた。予は此公案なるものは、甚だ非論理であつて、我等、文明の教育を受けたもの、決して信することが出来ないと主張したけれど、長老少しも肯はず、兎に角、精々に工夫すれば、其音聲を聞くことが出来る、即ち所謂、悟る時機がある故、撓まず屈せず、やつて



見よと教はつた、予は、此老僧及び禪なるものに信用を置いて居る事だから、箇中何等かの消息を包藏して居るに違ひないと、半は疑ひ、半は信じ、此夜は、此丈にして辭し去つた、歸途、友人は「オ、君、あんな馬鹿なとをやるか、隻手の聲なんて何だ、其んな下らぬ事を考えると、狂人になるぞ」と冷評した、しかし予は胸中一片の信仰があつて、異日必ず、一箇の阿羅漢たり得べしと、決する所があつたから、友人の苦言に應じないで、歸宅勿々、隻手の聲を聞べ初めんとした、

#### 四、坐禪工夫（隻手の聲―趙州の無字）

處か薩張、手の着け様がない、座禪を組んで、且切てどうすれば良いのか、全體工夫と云ふは、如何するのか、隻手に何の聲があるか、

其より先は行かれない、坐仕方がないから苦敷で溜まらぬ、止めて見たり、復勇氣を鼓舞して、オ、分らぬとがあるものかと坐して見ても、工夫と云ふとが出来ぬ、マ、其處ら、何か書物の中に、轉がつては居まいかしらと、座禪儀などを閲讀して見ると、斯う云ふとが書いてある「諸縁を放捨し、萬事を休息し、心意識の運轉を止め、念想觀の測量を停め、云々」又「箇の不思議底を思慮せず、不思議底如何か思慮せん、非思慮是即座禪の要術なり、云々」と、予は此に於て、禪は畢竟、無念無想を貴ぶのである、故に、總ての事物に對して、少しも念を起さず、善怒哀樂の境界に對して、木石の如くなるのが、工夫である、又、萬夫に傑出する底の大丈夫である、と觀念した、是からして、予は、其無心、否、實は無願着と云ふとを、修業して見た處が、駄目だ、全體、裡にあるものを、表から



抑えるのだからたまらない、度量を装ふて見たり、無感覺を拵らへて見たり、所謂虚偽の作用に醒醒したから、其結果、即ち却て、真正に怒る能はず、笑ふ能はずと云ふ様な、憤病漢となつた、隻手の聲を聞くとも出来ず、眞箇の無心を修むるとも出来ず、再び安國寺を叩いて、盤山長老に問法した、長老は其處で公案を換へてやる逆、今度は、趙州の無字を授けられた、是は昔、或僧が、趙州と云ふ活佛に向つて、あの庭にわんく鳴いておる狗の兒にでも、佛性があるか、無いかと質問した時、趙州は直に『無ッ』と答へた、是の無は、有る無いの無ではない、又虚無の無でもない、思慮分別でも分らねば、人から教はると云ふとも出来ない、何にも外に理屈は入らないから、唯『無ッ』と提撕し、打返へて、繰り返へし、通身、是れ箇の無字となるを工夫せ

世、佛性だの、狗の子だの、話に用はないぞ、設例、大地を打つ槌は外づるゝとも、如斯工夫して、見性悟道を得ないものは、未だ一人も無いと、斯様に説き示された、安國寺から歸つて、此度は、無字の工夫に取り掛つたが、唯『何ッ』と腹の底で観する許りで幾度やつても同じとだ、少しも結果がない、其でも、一寸座れば一寸の佛と云ふ言もあるから、何かの功德になるのであるかと信じて、時々閑暇を竊んでは無字を提撕して見たが、どうも所證がない、妙なものだ、斯んな事をやつて、所謂、大悟徹底なるものが出来るであらうかと、少々疑も生じ、終には、段々と工夫を休める様となつた、

### 五、天龍寺峨山和尚との問答

夏の末頃から、實父が胃痛に罹つて苦んだので、其看護に奔走した



が、終に秋の中頃、歿くなつて仕舞つた、  
此父の死後、予の一身は、人生運命の一大廻轉に出沒して、翌年の  
春、遂に家族諸共に、大阪に於て、實業界裡に匆忙することとなつた、  
才氣爛熳たる商界の獅子兒でさへ、此世智辛ひ世の中に、失敗を免  
れないのに、予の様な變哲な商業的門外漢が如何して計畫の不如意  
を免れよふか、世事に醒醒し、痛心した末、逆も予の様な神經過敏  
で、意志軟弱なる男が、活馬の眼を抜くと云ふ活世界で、輸贏を決  
する事は覺束ない、そこで膽力養成の方面からも、是非一度、禪門  
の關鎖を破り來らねばつまらぬと、斯う氣が付いたから、一時中止  
した禪に、再び心を寄せることとなつた、  
一日心齋橋通を行くと、或書店で、不圖、禪門法語集と云ふものを  
見付けた、面白そうだから、購つて來て讀んだ所が、工夫のほとと

付で、面白くことが書いてある、禪と云ふものは別に造作はない、  
唯、自己の本心を見る迄のことだ、即ち、見れば見る底の物は何ぞ、  
聞けば聞かぬ底の物は何ぞと、内に向つて、深く疑ひ行けば、其疑遂  
に底に徹して破るべしとあり、此を見性とも悟道とも云ふと、概  
畧斯様に説いてある、へ、禪は畢竟、自己の心の本體を參究さ  
するものであると、初めて、隻手だの、無字だのと云ふは、一の方  
便であると感じ付いて、其から、右の通り工夫して見るに、随分疑が  
起る、疑ひ來り、疑ひ去り、往々三昧に入る様に、うまくなつて來  
た、けれど、畢竟何ぞと云ふ一點に到達しては、暗々、黒々、一言  
も出ない、一歩も身搖さが出来ない、如何であるか、如斯時こそ、  
明師に就いて聽く要がある、と氣が付いたから、寺町の、寒山寺と  
いふ禪寺を叩いた、此寺の住職、中々親切なもので、此も愚僧が



説法することは出来ないが、此處に、當地の紳士達が、拈笑會と云ふのを設立して、毎月末、京都、天龍寺の峨山禪師を招待し、參禪せらるゝ仕組故、貴公も御入會あつては如何とのこと、さらば其會に加へて貰ひたいと言つて、其儘別れたが、月末迄は、どうも待ち兼ねる、段々様子を聞くと、右の峨山和尚といふ人は、非常の高僧で、朝野の英才を鑄冶せらるゝことに秀れて居られるので、掛錫の雲水も、他の本山に比して、餘程多いとの話であつた。

雄志勃々禁する能はずと云ふ風で、羈車に搭じ、嵯峨に到つたは、丁度、三十一年五月の下旬、嵐山の花は、最早散つた後だが、そろ／＼新緑の候となつて、桂川邊の風光は、得も言はれぬ時節であつた、天龍寺と云ふは、臨濟派本山の一で、後醍醐帝、後嵯峨帝の御菩提所、殊に、古蹟勝地の中に位してゐるから、其閑雅にて氣高い

き、何となく、俗塵の上に超然たるかの様に思はれ、予は先づ千種の靈感に搏たれた。

山門を入つて左に折れ、専門道場を訪ふて、刺を通じ、老師に面會をと頼んば處、暫らく待たせられた後、役僧に導かれ、森然として香氣馥郁たる一室に到ると、雲突く様な大入道が、黒染の法衣を着て大胡坐を掻いて、サア、まあ此方へお這入りと言はれた、げぢげぢの様な眉毛、へんの字の様な口元、天龍寺の鬼瓦と綽號がある通り、扱ても造作のない坊さんだと思つたが、能く／＼觀察すると、眼底光りあり、音吐鐘の如しで、中々計るべからざる偉人である、予が一通りの來歴及び願意を陳べた後、左の問答が初つた

峨山 大臣だの、大將だのと云つて、外國から少し許りの事を言つて來ると、ヒク／＼する様では、つまらぬでは無いか……當時



の才子だなどと云ふは、大概、色が蒼白くて、肺病患者の様で、  
只、目先許り小伶俐に立廻はる才子連のみで、お臍の下夕は丸で  
空だ、ツマリ、小才子と云ふもので、大才子と云ふ者ではない……

予 どうも、僅かの事に精神が動搖して我ながら困るです、如何か、  
眞の安神立命をなす方法を教えて貰ひ度い、

山 お前さん、其安心立命が出来ぬと言ふは、畢竟何處から来て、  
何處へ行くものだと言ふことが、分らぬからだらう、さすれば、  
其を見るが肝要じや、其を見るには、先づ、此の通りに坐つて、  
斯うして、(此時老師自ら結跏趺坐をなし)『隻手。に。何。の。聲。が。あ。る。ッ。』  
と、一心に疑つて行くのだ……

予 古佛の書いた物によつて見ると、禪といふものは、ツマリ自分

の本心を明めるに過ぎないから、見聞覺知の所に就いて、直に疑  
團を起す様、工夫したらば如何です、

山 其に違ひはないが、左様すると、其れ、向ふに花が見える、あ  
の花を見る物は何であらう、其れ、彼處に、蟬が鳴く、あの蟬の  
音を聞く物は何であらう、却て心が轉倒して、所謂、縁に奔は  
れ、境を追ふと云ふ、恐に陥るものであるから、隻手の聲の公案  
によつて、工夫するが早道じや

予 全體公案なるものは、工夫上、どんなものです、

山 公案は般若の利劍とも言つて、お前さんの妄想分別を斫り開く  
ものじや、斫り去り、斫り來り、幾等疑つても分らぬ、遂に、黒  
闇々たる所に達する、併し、其は虚妄の神、妄想の神と云つて、  
未だはんまの物じや無い、其所を、更に斫つて向へ出るのだ、



予 隻手の公案を措いて、趙州の無字を拈提して見度ひと思ひます  
が  
山 どちらでも宜しむ、無字ならば『無ッ』と、斯う大丈夫に提撕  
し『無とは何ぞ』と疑ひ行くのだ  
予 静中に於て工夫しても、動中に出づれば得力を失ふと云ふこと  
があるが如何です、  
山 元より、動中の工夫は、静中の工夫に優る千百萬倍すと云ふけ  
れど、定中に於て出来ないものが、中々、動中に於て成功は六ヶ  
敷し、先づ一應、定中に於て、見性するが早い、  
予が峨山禪師に質問した大要は、此の位であつたが、師は尙諄々と、  
老婆親切の垂戒を加へられ、今度面會する迄充分工夫し置けとの言  
であつた、

其後入室參禪もやつて見たが、どうも盲く工夫が付かぬ、峨山禪師  
の所謂、公案を以て研つて出よと言はるゝは、如何研つて出て良い  
のか『無ッ』と提撕した時は、恰も千仞の鉄壁に差向つたる如くで  
只是、進退谷まり、黒闇々、研ることも、刺すことも出来ぬ、

### 六、機鋒峻險なりと云ふ東岳禪師の禪は畢竟如何

全體、禪を修めんとするものが、甘い考で、面白半分によつて見様  
とするは、抑も間違だ、眞に向上の難關を打破し來らんとせば、所  
謂、命がけでなくてはならぬと、斯う氣が付いたから、大に決心を  
堅め、先づ、一切、家事を家族に一任し置き、再び飄然として、京  
都へ出た時は、卅一年六月上旬である、上京區、今出川なる、相國



寺管長、中原東岳禪師は、機鋒峻險で、手段頗る慧辣であるから、何人も、其風を望んで恐れ走るとの噂、サレド、同山内には、得庵居士の設立せられた、維摩會なるものがあつて、居士林の設もあるから、寧ろ、同寺に入る方が便宜が良いであらうと、或知人の勸告に従つた、左る猛烈なる宗匠こそ、予が修業をして、光明を發せしむるに足ると、予は忽ち天龍寺行きを變へて、相國寺へと方向を換へた、ア、迷中の迷、夢上の夢、咄、何等の輕躁狼狽ぞ、予は漸く維摩會員となつて、居士林に入ることが出来たが、管長は中々逢つて呉れない、寺僧に伴はれ、二度往つたが、二度ながら刎付られ、漸く三度目に相見が出来た、機鋒峻險なりと噂の高い、東岳禪師の禪は、畢竟如何であらう、

淺黃色の法衣を、折目正しく着け、盤石の如く座り込んで、片手の如意を、腕と突き立てた東岳禪師は、寸毫の笑みをも狭まらず、音吐堂々、さながら、獅子の吼ゆるが如くに感せられ、一見、底氣味の悪い雄物であつた、でも、予は賓客の禮を以て迎へられ、老婆懇切なる垂示は、混々として、長江大河の如く、殆んど數時間に涉つた、東岳禪師、ヨシ、其なれば無字でもよろしい、……大千世界が無字三昧で、大地に塵一ト越も無い處に至つて見よ、三世十方を座斷するのだ、其處で、フツと氣の付く事がある、予、公案を以て、妄想分別を斫ると言つても、斫り得ない所に到つては、如何してよろしいか、東岳、ナニ「無字」と、ホラ工夫して、無字一枚になつた時は、斫



る物も、研られる物もありはしない、予、大器、大用の英靈漢は、一言下に大悟して、遠く幽關を超ゆる事といふ事であるが、余等の様な、氣根拙劣で、何事にも、逡巡避湯する様な生れでは、どうも覺束なく思はれます、寧ろ、元氣澄測たる、粗暴漢がいゝではありませんか、東岳、左様、併しながら、禪は畢竟、自己の心身を静むるの法であつて、此が爲には、頭痛、逆上、又は發狂の様な者でも、平癒するると云ふとだから、強ち、亂暴したつて、寸益あるとではない、曾、此の大三昧(即眞箇の一心)に入らんとするには、所謂、志は毘盧の頂顛を踏み、行ひは嬰兒の足下を拜す、と言つて「何ツ、己世ツ」と云ふ勇猛なる志を以て憤發し、然も、行は溫柔平和にせねばならぬ、怖いの、恐しみの世道にて、能く々々考へて御覽、

全體、お前さんがあるから、お前さんの世界があるではないか、貴いもの、恐しむもの、皆、お前さんがあるから、ちやんと具はつて來るのだ、己より、貴いものはない、予、其では、忠孝の道が、東岳、己に其は、第二義の話だ、手、未だ、見性の出來ない者が、續々入室參禪するは、如何云ふ譯です、岳、ツ、掃溜見た様なものだ、色々の妄想理屈を、棄てに來るのだ、お前さんが、是から工夫をしたつて、同じ事だ、どし、理屈を捨てに來ねばつたらぬ、工夫中、此處を思ふ時あらば、入室參禪して、所見を吐くがいゝ、スルト、予が其を奪つてやる、果して違つて居るから、どんな理屈でも、どんな分別で



も、乃至悟でも、皆、奪つてやるのだ……赤裸々、赤條々、  
コでなければつもらぬ、だから、精々頻繁に、入室するが、  
予然らば、無字を拈提するとき、疑ふと云ふ必要もないですか、  
岳一氣に進んで、無字三昧に入れば、疑ふものも無い、唯、箇の  
無字三昧の所を見て來よ、  
東岳禪師の説法の要點は、大略斯の通りで、殆ど安國寺長老と、同  
一であつたが、機鋒は中々鋭い所がある様思はれる、此の外、余の  
進退に就いて、懇々と教へ、或は種々の例話を擧げ、彼の一夜にし  
て、大悟徹底したと云ふ、有名なる山梨平四郎などの話を證とし、  
專一に究明したらば、見性疑なしと言はれた、

### 七、此から愈々正式の座禪

居士林に歸つて、先づ座を造り、扱、此から愈々正式の座禪にと取  
懸つた、相變らず、工夫が思ふ様に行かぬ、苦しんだり、急いだり  
した結果、疲勞となつて、色々の妄想が出る、耻しい話だが、酒だ  
の、女だの、過去の怨敵、故國の山水などが、のこくと遣つて出  
る、是ではならぬと、自ら鞭撻し、叱責し、遂に漸く、一條の真理  
(實は小理屈)を捉え、翌朝の參禪にと出懸けた、  
果然、管長は、昨日の親切なりしに似もやらで、予が入室せるを見  
向もせず、一條の名香に包まれながら、唯、虫を喰つた様な顔色を  
して、苦り切つておる、盲者蛇に怖ぢずで、予は胸中の氣焔を吐か  
んが爲め、すつと進んで、管長の膝下座し、未だ一言を終らざる



に、大喝一聲は、迅雷の如く震ひ來つて、心肝を刺つた、予が豆の  
様なる膽は、縮み上つて、二の句も續けず、理想も、妄想も、何處  
へ行つたか、分らぬ様となり、這々の體で室外へ出た、  
唾を勿れ、設令千軍萬馬の間を疾驅し來つた人傑も、此の室内に於  
て、從容自若たる者は、甚だ容易ではあるまい、況して、我が此の  
無字を打破せんとの六ヶ敷は言を俟たないことである、  
形而上、形而下、何れにしても、苟も人間の智識の上に成り立つ  
たものは、盡く嘘だと云ふのだから、口若クなどでは迎も駄目だ、  
依て、唯、管長の云ふまゝに、思慮分別を擲つて、兀然端座、雷、  
無字一枚となるを工夫した、が、どうも、純一無雜と云ふ様になれ  
ない、誰れも初めの間は、憤、斯んものであるかも知らぬが、最  
初は、色々の心相が混つて仕方がない、激しく勇氣を鼓舞し、假令

ば、大刀を揮つて、亂軍の中を邁進する如くに、一氣以て無字を拈  
提すれば、段々諸相は逃げ去つて、終に無一ツとなる事が出来る  
けれど、今度は、呼吸の氣息が邪魔になつてならぬ、出息入息の響、  
心臓、動脈などの働きの爲めに、無字が、或は膨張し、或は收縮し、  
どうも動搖して、いかぬ、  
或る僧に就いて、此のことを質すと、彼は呵々と笑ひ、其んな邪魔  
になる呼吸なら殺して仕舞ふが良い呼吸が邪魔するなどと云ふは、  
未だ、眞の三昧に入らぬからだ、勇猛精進の必要なのは、其處だと  
言つた、  
妙なもので、段々熱れると、自然、呼吸は殺し盡すことが出来る様  
になつたが、夏の初頃だから、有名なる、萬年山の白ネボン穿いた  
蚊群が、ふん／＼やつて來て、大に妨害をする、併し、蚊は蚊帳が



あるから、是で喰ひ止めるけれど、今度は、疲労と、睡魔とが、烈敷攻め來つて、到底、無字も是には、敗北せざるを得ないこととなつた。所謂、前門虎を防げば後門狼を進むだ、向上の英才、若くば世間學者の眼より見ると、予が這般の工夫は、兒戯に類するかも知れないが、當時の余が境界に取つては、決して兒戯でない、満身の熱血を絞つた奮闘である。

毎朝、毎夕の入室に一月餘もたつと、最早、管長へ言つて行く事が無い、正か、出鱈目、出放題を言つて行く譯にも行かず、其でも、鐘が鳴ると、殆ど義務的、規則的に、専門道場に出掛けて、雲水の列に加はるが、胸中は全く無一物で、管長が叱咤咆哮する聲、大棒を揮り廻す凄まじき音などを聞いては、我ながら逡巡して、『最早參禪が厭になる、仕方がないから』『マエ、胸中は全く無一物です』

と言つた處、管長は陽聲一番「ナニ、貴様が頭から尻迄、ぐらぐら妄想が煮え返つておる」と罵倒した余は自ら、一念の妄想も起さざる者なるに、管長は、ぐらぐら妄想が、煮え返つておると言ふ、余は果して、左様なる妄想家であらふか、寧ろ、門外漢なる友人に就いて、試験せんと、散歩旁、山門を出で、友人の宅を訪ふた、然るに彼等は、予が話對手になつて呉れぬ許りでなく、異口同音に、嘲弄を初めた、君は、慥かに、禪に迷ふておる、吾輩は、禪は修ないが、君よりは遙にたしかである、全體、禪の様なものをやると、君の家計上、何か、三文の利益にでもなるのか……其んな悟など云ふ物が、あるものか……早く止すがいゝぞ、坊主になるのではあるまいし……妄想のない君が、禪の爲めに、却て妄想家となる



と、斯う云ふ風な、冷笑的忠告で、丸で對手にならない、予は敢て争はず、燕雀焉を雲間の消息を知らんやと、高をくゞり、居士林に歸つたが、友人の嘲笑が、耳底に残り、心は自から、大阪なる家族へも走る、最早、本山に入つてから、二箇月にも経たずとするに、  
山の所證もなく、工夫も盡きた、初志に背いてはおるが、いつそ、辭して歸宅しようかと考へ、或日、參禪の序「モウ工夫も盡き、仕方も盡き、進退殆ど谷まじりましたから、止して歸宅しようと思ひます、全體、吾々が禪を修めんなんと云ふは、非望の企です」と、自暴的白狀をなした所が、管長靜かに拂子を振り「其はいけぬ、佛に逢へば佛を殺し、祖に逢へば祖を殺しと言つて、グツと、無字三昧に入れば、造作はない、勇猛の衆生は成佛一念にあり、懈怠の衆生は涅槃三祇に渉ると云つても、お前さんが、勇猛に逢へやねば、一夜の

ことだ、』

余は尙志氣阻喪と云ふ程でも無いが、未だ聊か、自棄絶望の感を抱いて、専門道場の或僧に語つた、彼は眞骨頭からして、予に同情を表し「君其處がいののだ、百計盡き、進退谷ると云ふ、其處に行かねばつまらぬ、もつ、百尺竿頭だ、其處迄來つて、止すと云ふは實に惜しい、實は決して、追従ではないが、我々同伴も、大に望を君に屬しておるのだ、君等がしつかり遣つて呉れれば、吾々僧侶の鑑にもなるから、どうか大に奮發して、東岳門下、此の獅子兒ありと云ふ様にやつて呉れ玉へ、兎に角、今一應、退轉の念を離れし、兩三日間、寢食を忘れる様に工夫して見玉へ」云々と、  
余は此激勵を聽いて、心志風發、勇氣勃興し來つて、白隠禪師の所謂阿修羅大力鬼に兩臂を捉へられ、三千大千世界を千回萬匝すと云



へども、正念工夫兩畔も打失せずと言へる様に、又長槍を採つて、萬人の敵に向ふと云ふ如くに用心し、寂然として座はり込んだ、何と出て來ても無だ、食事に取ら懸るも、雪隠に上るも、或は坐し或は起つも、只是、無字一片のみである、遂に、無字を以て眠り、無字を以て覺めた、翌日も亦此の通りで、無一字より外にはない、翌々日の正午頃、今出川の湯屋に行つたが、何時入浴して、何時湯から出たか分らぬ位、歸路に、或溝渠へ足を込らして、墮ちたが、猶無字を放さない、無、無、無、只是、一條の無と云ふ棒があるのだ、併し、自らは知らない、

### 八、大死一番絶後に甦れ

如此、精神を抖擻する事二日間餘も續けたが、其様は氣根が繼かな

い、二日目暮方、一放工夫を休めて、長大息をしながら、居士林の様先に轉がり、一寸と兩足を障子に凭し、庭前の松の木を眺むるや否、阿と叫んで起き上つた、玲瓏たる空間、唯、松あるのみで、我がない、我が松に往つたか、松が我に來たか、回面の光景、何となく透明にして、清々、涼々、大に前日の見と違つて居る、是悟であるか、是迷であるか、茲に於て、予は、寺町通なる清淨華寺院に至り、維摩會の幹事、廓道道居士を訪ねて、斯々と語つた、彼は微笑して、無言なること半時、徐ろに、手もて圓相を畫き、一あつて二ない、大圓鏡智と言ふや否、予は分つたと膝を拍ち如何だと言はれたので、古池や蛙飛び込む水の音と答えた、サア、嬉しくてならぬ、匆々に相國寺に歸り、専門道場に駆け込ん



で、副司寮の僧を捉へ、氣餒を吐き初めた、何とか云ふ一僧が、やつて来て『まてく』と言ひながら、ちよいと扇子を起てた、予は直に「扇子三昧」と答ふるや、彼はしか言ふものは、其は何だ」と斫り込んだので、予は將に説明しようとする、呵々大笑し「道の眞物」と言はれ、予はグツと口が動かない様になつた、其んな物があつては、大に、君の前途の妨害をするから、早く管長に參じて、奪つて貰へと、傍なる一僧は忠告した、次の參禪には、管長必ず、大棒を喰はするであらうと思つたが、左程でもなく「尙是、妄想だ」と罵倒した、家を捨て、世を捨て、行雲流水に身を托して、五年、十年、乃至二十年、眞實に修行する僧侶ですら、未だ向上の一路を透過し得ない者があるに、予の如き、俗界の大俗物が、一年や半年、僅に座禪の

眞似をしたからとて、物にならぬも無理ではない、併しながら、女ですらも、現に、箇の趙州無字の公案位は、見性打破して、遠く難關に向つて、疾驅する者ある由、聞き及んだるが……ア、我ながら、大丈夫でないと思痴を翻した、東岳禪師は、此後、口癖の様に、予に向つて「大死一番、絶後に懸れ」と言はるゝ、大死一番とは、どんな境であるか、實に愚なものだ、理盡き、詞究つて技も亦極り、心經に所謂、知もなく、得もないと云ふ所に徹するに、其を見ようとするから、尙更見えぬ、即、尙、其許りでなく、何か、其處らから、悟と云ふものが、轉がつて來はせぬかと、狼狽える、滑稽も實に、此に至つて極れりだ、

九、禪界—實業界



八月下旬に至り、終に家事の都合上、止むを得ず、愈々、相國寺を引拂ふて、大阪へ歸らねばならぬ事となつた。初は脱兎の如く、終は處女の如しと云ふことは、能く世間にある事なれど、殊に禪に於ては、十中八九、皆左様であつて、予も亦、其同列に外れない、が、さりながら、予は相國寺を去るに當つて、全く禪に志を絶つたのではない、何日か再び、時機あらば、箇の趙州無字の公案丈は、究明して見度い否臆度、出来る時節があるであらふと、稍、信を抱いておつた。暇乞旁、管長に逢つて、今後、大阪に下り、商業に従事する上の工夫、即ち、動中の工夫に就いて、質さうと思つたが、生僧、管長は不在であつたから、専門道場の高弟某に就いて尋ねた所、無念、無相、獻山に對つて、般若の利劍を揮ひつゝあつた、僧某は、徐ろに定より出で來つて、予が大阪に下る云々の話を聽き、滿腔の



眞摯を以つて、「君が禪門に歸依し、奮勵せらるゝは、我等怠弱なる僧侶の恥づる所であるが、一方から考へると、俗人であつて、親を捨て、妻子を捨て、家業をも顧みざるのは、佛の本志に背いておる、且つ又、禪といふものも、左様なものではない、ツマリ、商人なれば、専心一意に算盤を弾き、農夫なれば、餘念なく鎌を握り、官吏なれば、誠實無二に其職務に従事するが、是が即ち、禪である、君が此から、實業に従事せらるゝも亦、其通り用心せられねばならぬ、开して其傍ら、朝夕、一時間、若くは二時間の暇を求めて、閑座工夫せらるるなれば、定めて發明の時があるであらう」と、恰も、小學教師が、兒童に向つて教訓するが如き口調で、説き聽かされ、予は厚く其懇切を謝し、再會を期して、大阪へと向つて歸つた、萬年山の幽邃なる居士林に於て、知んども、出世間的の人であつた處の予



は、再び紅塵高丈たる、大阪の實業界に立ち、中の島なる、某製造  
會社の販賣部員となつた、  
晝は冷の所謂、ハイカラ黨の様な風をして、東西に奔走し、夜は前  
掛角帯で、家族を相手に、十露盤を弾き、所謂銖錙の利を争ふ大々  
的俗事に従事した、  
禪學の上に於て、俗事だの、佛事だのと云ふことはない、又、理想  
が高いから、學問があるからと云つて、其で出来る筈のものでもな  
い、寧ろ却つて、學問の無い方が良いかも知れぬ、昔は、鍋の尻を  
磨りつゝあつた下女が、豁然として大悟し、又、牛肉屋の庖刀持が、  
忽然庖刀を擲ち「我も亦、千佛の一子なり」と叫んだ例もある、さ  
れば、予が商賣屋の亭主となり、會社の手先となつた處が、其で、  
禪の本旨を沒了したと云ふ譯にはならぬ、

會社の業務が稍々閑になつた時などは、一同ストロブの傍に集り、  
予を捕へて、禪學談をやらせる、予は和尚氣取りで、昂然として禪  
を語る、其狀、恰も洋行歸りの才子が、巴里倫敦の實況を語る様殆  
んど、峨山、東岳の受用底を觀破し來つたかの如しで、社員連は、  
丸で氣煽に捲かれ、呆氣に取れておつたが、恐らく、陰では、舌を  
出して嗤つたかも知れぬ、  
禪を生嚙りして、悪く悟ると、妙な天狗になる、予は當時今の政客  
の誰やらの様に、自ら高くツン止り、銀行、會社の才子連などが、  
善い、悪いの、入釜敷騒ぐを見ると、無性に自ら落着き拂つて  
『ツマらぬ事に騒ぐ、ツマらぬ事に喜ぶ、ツマらぬ事に争ふ、ツマ  
らぬ事に腹を立てる』と、何でも人の爲る事が、盡くツマらなく見  
えて、其結果、彼等の功名として研究し、恥辱として彌縫するところが、



予には少しも、功名と思はれざるが故、研究もせず、恥辱と感じないので、焦心もせず、往々ボンヤリとして居るから、自然、會社の業務に練達し、社會の歡心を得る事も、先づ遅い方であつた、拈華微笑の極意は知らぬにもせよ、以内傳心の術には、頗る機敏なる大阪人の事であるから、予の胸中は、早くも彼等の了得する所となつて、氣障な奴だ、忌々敷い奴だと思つたが、先づ、無能と云ふ評が起つた、予は實際、無能であつたかも知れぬ、呵々排斥に出逢つても、攻撃に出逢つても、鏡佛の如く、ピクともしなかつた、故星亭は、其邊丈は中々エライ者であつた、予は口では禪を語り、腹では社會を見下ろしておるけれど、無能だなんぞと呼立てられて、排斥されては、心中大は動搖せざるを得ない、何せ、左様動搖するだ、何も、其様動搖する必要は無いではないかと、理屈

は盲く行くけれど、其所は、人物の大小如何にも關係するが、畢竟、忽ち、日々の利害に、影響を及ぼして來るからだ、此の利害の二字は、往々、予が禪を滅茶々にした、處が、予は正直だ、悪心がないと云ふ所から、或一部の人士などは、予を信認し、互に重きをおいて、肺肝を交はすこともある、特に、予が職を取つた會社の、支配人某は、随分解つた人物で、彼の、當年の、蓮門教信者だと云へば、世人は忽ち、嫌惡、卑俗の念を生ずるが、中々嫌惡すべき人物でない、又卑俗なる人物でもなく、彼は予を容れ、予は亦彼を重じた、予が當時相往來して、忙中の閑語を弄した中、工夫上有益なる、面白き談話があるから、其人物、三人を擧げて見よう或日、右の支配人の宅で、數番の立談を圖はした後、支配人は、斯う云ふことを言つた『予は嘗て、知邊宅にて、身延山



の管長に面謁し、人生安神の事を、尋ねたのに、管長、直に紙片を取り出し、「心の主となれ、主の奴となる勿れ」と云ふことを、書いて呉れたから、其ことに付いて、餘程研究して見たが、どうも解らぬ、理屈を以ては、到底考が付かないから、日常實際の上に於て、如何したらば心の主となれるか、如何したらば自由に心を使ふことが出来るかと、鍛錬、工夫を重ねること、殆ど二ヶ月に垂んとしたけれど、どうも解らぬ、色々、様々に苦んでも、發明がない、如此研究を怠らなかつたが、或日、ヒヨイと其研究を措いた處、思はず解つた「予」どう解つたです」支配人「何にも捨てた處、何にも考へない處だと氣が付いたです……………即捨て切つた處から、大に働き出し、大に考へ出るのです」

斯る香氣を含んだる奇説を聽かんとは思ひ懸けず、此よりして、一段、其人物を見上げざるを得なかつた、又一日、辯護士某を訪ねた、此辯護士、從來、峨山禪師に參じ、禪に於ては、頗る造詣あるとの事故、余は種々法話の末「峨山和尚は、研つて行けと教へ、東岳和尚は、無字三味の處に、研るの、刺すのと云ふことではないと言はるゝ、どうも、天龍と、相國の工夫の仕方が違ふ様だが、何方が良いでせう」辯護士「……………即妄想、分別が邪魔をして、真如が見えないのだから、其を研る爲めの刀として、峨山和尚は、公案を授けるのだ、けれど、此が用をなして了つたときは、復、其ものが鑿となつて、邪魔をするから、其時、更に又、其刀を取り上げ様とする手段で、ツマリ、初與へて、後之を奪ふと云ふ仕組、餘程、濟度が面白い、然るに、東岳和尚は、初から、悉



皆奪つて仕舞ふと云ふと云ふやり方、大根器、大智慧を具有する底の英靈漢には、其で良いかも知らぬが、我々下根の人を濟度するには、峨山和尚の方が、巧妙だと思はれます、

大阪商業會議所の謀長某は、予が知友中、有爲の奇男子であつて、陽明學を研鑽して「天下、豈復、心外の事、心外の理あらんや」などの語に付ては、頗る工夫しておつた様であつた、嘗て彼の雜誌中『あまり才氣のはぢけた者は危いものだ、實に劍呑だ、人間は、少し馬鹿な所があるが良い……………或所に於て、獨園禪師の書を見だが「打破八識當丈夫、勿學小智須大愚」とあつた、何と旨いではないか……………予が大阪に於ける生活の半面には如此良友を得て、精神上の利益と、慰安とを得たが、實業界に於ては、終に蹉跎不遇を免れない、拙い

商業の爲め、僅か許りの資本を失ひ、止むを得ず、計營せる商業を廢して、天滿の片ほとりに屏居し、辛ふして、一家の生活丈は繋ぐことが出来たが、前にも言つた様、會社に於ける予は、亦餘り、得意の境遇でもなかつた、左程の人物でもないものが、抹香臭く街ふて、人物振るは、甚だ俗受の悪いものだ、時に、商業界などに於ては、實際役に立たぬものだ、間拔なる予は、往々凌辱と擯付とに堪へ得ないで、商業的難局に當る毎に、此紛々たる都門の塵を厭ひ、山水長閑けき田舎の光景を慕ふ様となつた、

### 十、失敗——絶望——懊惱

十一月の中旬より下旬にかけて、第三及び第四師團の貔貅が、攝河泉の野に於て、大演習を行ひ、



陛下の御臨行もあがりで、其を拜觀の爲め、國元より親戚共が上阪し、予が家庭は、俄に、嬉々、快々の春となつた、斯る處に、予が社長は、幾多の社員中より、予を抜擢し、〇〇會社東京本店詰に推選する都合故、不日、同伴東上すべしと言渡された、是は、畢竟、予が正直なるを利としたるものであつて、予に取りては、破格なる昇進であつた、茲に於て、予は將に、東都に上り、〇〇博士の麾下に就いて、大に、驥足を伸さんと云ふ、有望なる境に立つたる所、突然、非常なる災厄に遭遇した、  
時は十一月卅日の夜、予は不日、東都に向つて出發するのであるから、一族と酒酌み交はした後、國元から來た親戚の請に任せ、市中散歩にと出懸け、例の天神社の裏なる、一劇場へと這入つた、一幕を終つて、今や二幕にかゝらんとする刹那、俄然、警鐘が鳴り出し

「火災、々々」の聲は、劇場の内外に聞える、予は何時もの警鐘に慣れて居る事だから、左程驚きもせざりしが、何となく、胸騒がしてならなかつたから、木戸口から覗いて見ると、表の方は、早、人足が足繁く馳せて行く様子が、容易でない、「火事は何處だ」と問うと、スグ其處だと言ふ、そこで跣足の儘飛出して、町角を廻ると、炎焔天に漲つて、恰度、予が居所の方向に當つて、凄じき響がしておる、予はと、胸躍らしながら、馳せ着けると、這は如何に、予が居所は、今や火焰に包まれ宛然漏斗の如く、火の粉を吐いて居る、敏速なる警察は、ハヤ、非常線を張つて、消防夫は、徐々唧筒を卸しておる處、  
巡查は、予が血眼となつて入り來るを妨げ、洋刀を以て撲つ、彌三馬は、予が荷物を奪はん連、予を衝き、且つ倒す、ト見れば、家族



は僅か許りの荷物を携へ、跣足のまゝ、懷え、老母は目を白くして、物に凭りつゝ、死人の如く呼吸がない。「母様、如何だ」と疾呼する。僅に顫えた指を上げ「……彼を……、見よ……」と已に運命の非なるを悟るが如く、其儘、倒れんとした。

ア、此時、予を援け、予が母を助け呉れたものは、同地の俠客、某であつた、警察に引かれ、裁判所の判決を受け、家財を失ふて、然も幾多類焼の難を蒙つた人から、忌はしき非難、侮辱、強迫を受けながら、腰を屈し、頭を垂れて、謝罪せざるを得なかつた、予及び予が一族の心事は如何であつたらう、

形ばかりの裏店を借りて、漸く居所を定め、扱、前途の計畫を談じたる時、母は、最早都會の生活は厭だから故國へ歸へして呉れと云ふ、予は餘りの激變に、茫然たる折柄、強いて之れを止むに恐びな

いので、其請に任じ、親戚に托して、母丈を歸國さすことにした、夜嵐寒き師走の夕、梅田のステーション迄見送つて、今や、袂を分たふとする時、母は涙ながらに「どふか辛棒して呉れ、丈夫であつて呉れ」と言はれたので、予は殆ど慟哭して、聲を上げることもし出ず、汽笛一聲、轆々と、西に向つて走る汽車を見送つた、

其後、會社へは、依然務めて居たが、東京行は、右〇〇會社の都合によつて、延引に、延引を重ね、終に、一先、見合さねばならぬこととなつた、其年も暮れ、正月は來たが、つまらなき正月を迎へた、熟考すると、所詮、會社などの俸給に衣食する位では、失敗を恢復し、錦衣故郷に歸ると云ふことは六ヶ敷し、寧ろ、如何なる勞役に従事する共、獨立して最後の輸贏を決し見んと、斯ふ決心して、終に、斷然、會社を辭し、同所川口に出で、股引、前掛、あつし。



と云ふ姿で、瑣小かなる店を開いた、實に妙なものだ、絶對高尚なる理想の上に、揚々たりし昨日の我が、今は、錢が欲しい、々々々々々と云ふ、阿賭物界裡の奴となつて、見栄も、體裁も構はず、時に或は、車の後押しなどをなし、東奔、西走、非常に急つて見たが、薄命の鬼は、何處迄も予の身を離れず、掉尾の働も、終に駄目であつて、焦燥だてば、焦燥だつ程、失敗を重ねる、失敗、々々、終に、進退殆ど谷まると云ふ境に陥つた、ア、何の顔あつて故郷に歸り得ん、故郷に歸ることも出来ず、更に、勇氣を鼓舞して、今一戦を試みんとするも、最早、刀折れ、矢盡きたる後で仕方がない、不快、々々、殆ど絶望の有様で、自然、懊惱として、神経は過敏となる、漸く、身心を静養して、徐ろに再舉を計るが宜からうと、友人の忠告に従つて、終に此無謀なる、且つ不能なる、商業的野心を放棄し、

一先家族を率ゐて、大和の山間、五條の講に、隠れることとした、同所に於て、予が如何なる生計を取つたかは、敢て言ふまい、

## 十一、南和に於て工夫三昧

王子驛より、汽車に搭して南に走ると、遠く、當麻寺、畝傍山等を雲煙の間に眺め、高田、御所、葛を過ぎて、北宇智邊より、汽車は、噌唌たる山間を縫ふて、遂に南大和の平野へと出で、茲に風景は一變して、頗る、涼しき畫圖の中へと、入る心地がする、雄大なる金剛山は、眠るが様に、脈を打つてのびくと紀州の方へ横はり、透迤、屈曲して、奇麗な砂礫の中を走る、吉野川の流水は、清冽、水晶の様であつて、初めて茲に來たものは、しばし、恍然として我を忘れることを免れない、



醒醒として、寸毫の油断も出来ざる十字街頭より、出で來つた予は、此の境に立つて、果して精神の慰安を得たであらうか、否、予は當時、此の明媚なる山水に對して、風光の樂しむべきを知らなかつたではないが、失意、落魄の後、一種悲むべき懺悔の念が、痛く、胸に潜んで居るから、中々、慰安處ではなく、事々、物々、不快の種ならぬはない、されば、往々、酒を蒙つて、常規に逸したる言語をなし、常識ある士人の、指揮を受けた事も間々あつた、當時、當は一種の神經患者の如く、正しく人を見る事が出来ず、何でも、人は、我を嘲けるかの様に想はれ、而も、我は、甚だ精神の非なるものであると、自ら叱責し、轉々、煩悶して狂ひ廻はつた、腑甲斐なき我、意氣地なき我、早く一條の血路を開いて、金剛不壞の身とならずんば、來世の安神は兎に角、殆ど今世か危い、

一日、無門關を繕ひて、「如香了箇熱鐵丸相似、吐又吐不出、癆瘵從前惡知惡覺、久久純熟、自然内外打成一片、如墜子得夢、只許自知、轟然打發、驚天動地、如春得關將軍大刀入手、逢佛殺佛、逢祖殺祖、於生死岸頭得大自在、向六道四生中遊戯三昧」と云ふに至つて、翻然として、徒らに苦むの非を覺り、乃ち、徐ろに起つて、天神地祇に祈り、三世十方の諸佛にと契つて、無上菩提の道にと趨向した、予が禪學に於て、眞に大憤志を振ひ起したは、實は、此の時である、南大和に於ける、予が工夫三昧は、甚だ烈しき者で、或時は、千仞の斷崖に臨んで、正念工夫を凝らし、或時は、吉野河畔に立つて、夜の更くるを覺えずなる迄、精進したが、身心疲勞の後であつたから、腹底に力が入らず、硝もすると、頭上へのぼつて、逆上の氣味がある、家族は予が餘りに、禪定の事に努力するを見て、萬一の事



あつてはと氣遣ひ「左様、凝つては……」と諫める、土地の村長某は、深く予が不遇を憐み、屢々予を誘つて、鮎獵に伴ひ、一種の慰藉をして呉れた……噫、彼が闇に乗じて、吉野川に網を揮ひし夕、予は角燈を提げて、砂磧の上に躊躇り、潑刺として、盜る、許りの獲物に、莞爾相携へて、歸途に就く時、予は「俗界亦此樂あり」と言つた、

サレド、予が趙州無字の、眞面目に徹底せずんば止まずと云ふ志望は、日、一日に昂進し來つて、古佛の所謂、高き戀を望むが如く、又、不俱戴天の怨敵を狙ふ如くに、汲々として、工夫の相續を怠らなかつた、一夜、暴風雨のとき、椽先に座はり、午前二時頃迄やつた時、露の落つる音を聽いて、此ではないかと思つたが、其は何でもない妄想であつた、

## 十二、高野僧との對戰

吉野山の櫻が、昨今、満開であるから、見に往けと勧められたので、左程進みもせなかつたが、餘り天氣が良いから、飄然として出懸けた、五條から、下市、六田の渡迄、三里の間は、花見の客を以て續けておる、綺羅を凝らしたる紳士、淑女の間に、前後して、一人の、年若き僧が、白衣に兵兒帶、頗る見すばらしき風采をして、やつて行くを見て、予は今日の花見は、必ず此男にありと觀じ、突然、言葉を交した處、此は、高野大學林の生徒で、教學に於ては、頗る造詣あるらしひ、彼一語、我一語、咄は、教理の上に於て花を咲かし初め、彼は三摩地の菩提心を主張すれば、予は趙州無字の直指を提擧し、彼も、予も、好敵御座んなれと云ふ姿で、傍若無人の戰鬪を



やる、予は面倒なりと、直に肉薄して「畢竟何ぞ」と祈り込んだ處、彼は正直にも「修業中の我等、未だ其境界を識す」と答へ、最後に「それど煩惱妄想を断ち、貪瞋痴の三毒を伏滅すれば、自ら三摩地の菩提心に到達すべけれど、然し、其處に到れば、又案外、我々の豫想に違ふものがあるであらう」と、戦争は此で休んだ、六田の渡を越え、吉野山に上り、吉野神社、藏王権現、吉水院等を拜し終つて、小高き丘に上り、一目千本を見卸ろしたとき、僧は復斯ふ言つた「吉野々々と云ふが、來て見れば、案外ですな、汗水洩らして、悟つた時も、亦丁度、斯んなものでせう」と、櫻樹の根に腰打ち掛け、散り來る花に浴びながら、予は腰なる行厨を開き、先づ、一箸の肴を勧めたが、彼は教律の嚴しき爲めか、聊か逡巡する様子、茲に於て、予は柄にない大氣焔を吐き初め「全體、

今の僧侶が、世界に雄飛することの出來ないは、餘りに、保守的、厭世的、消極的であるからだ、僕は禪を學ぶけれど、死んだ禪は嫌だ、バチ／＼生きて飛ぶ禪が學びたい、肉を喰つたつて、酒を飲んだつて、其で悪い佛法なれば、佛法は、此十九世紀の活世界に、無用の物だ、君等、有爲なる文明の僧侶が、肉食を避くる様では、逆も駄目だ、やり玉へ、身體をこはしては、何にもならぬ、況んや、喰つても、喰はぬと云ふ境界が、あるではないか……」と、興に乗じて、浮れ出すと、僧は「左様だ」と云つて、一口やり、二人は相見て、哄然大笑した、

僧は其處より、袂を分つて歸途に就き、余は唯、一人、如意輪堂より、延元陵を拜し、日暮、歸途に着いたが、近來にない快談をしたので、工夫と云ふ重荷を卸すこと、丁度、一日、是又、工夫の一ツ、



## 十三、工夫の迷——峨山禪師の返書

京都なる妹が、贈り呉れた、禪關進を繕いて「大疑の下に大悟あり」と云ふ語に撞着し、工夫上大に迷ふた、余は從來、唯少しの疑もなく、無字一片に打ち去るを工夫して居たれど、工夫が違つては居まいか、疑ふと云ふは、如何疑ふのだ、或人は「無ッ……無と言ふものは何物ぞ」と、斯ふ疑ふだと言ひ、又或人は、「無ッ……此無は何處から出て来るか」と、疑へと致へ、復、或は「無字、畢竟何の道理かある」と、工夫せよとの説もある、疑ふが良いか、疑へば、如何疑ふが真正であるか、疑を捨て、無字三昧となるの工夫は、相國寺以來、餘程熟しておるに、今更、其工夫を改めて、大疑團を生せんことは、何か事を新らしくする様感せられて、甚だ困難に想は

れる、さりながら、疑團を凝らして、早く出来るものなれば、断然、今迄の工夫を、やり變へねばならぬと、斯んな迷の爲めに工夫が兩路に分れ、どふも、一筋道を辿る事が出来ない、茲に於て、書を天龍寺に飛ばし、峨山禪師に質すに、此事を以てした、其返書に、復啓春暖の候愈御清福奉南山候次に小生無事此頃内東上昨日歸山仕候次第御安神可被下候陳ば此度無字三昧修行の事に付尋問別に疑團を凝らす物有之は正道に無之唯々無字を拈提して如何なる者ぞと無字一片に打去り又打來り候得ば眞の三昧に入り申候其節見性の遲速を思念するは古人も極めて忌み申候譯に有之候眞の三昧に入れば即妄念滅す妄念滅する時は眞性出現之外無之候右多途に涉らず三昧に入て無字を拈提する節は必ず不覺失笑の時有之候間大丈夫にて眞修可被成候呵々先は回答迄申進候 草々頓首



と、斯様な返事を頂いたが、是ではどうも、余が質問の要領を得ない、近邊の寺院を叩いて、相談して見ようと思ふけれど、此邊は、高野の僧許りで、仕方がない、泉州、堺の南宗寺、師家、東海庵蜻州長老と云ふは、大徳寺派の老古錐で峨山禪師と共に、例の雪潭の法孫であるとの事を聞いて居たから、遂に、此人に往つて見様と思ひ立つた、

#### 十四、歩行三昧——ゴロく三昧

五條から汽車に乗れば、雜作はないが、故らに彼の金剛山の山脈に當る、大澤峠の峻嶮を越して、河内の長野停車場へ出ることにした、暖なる小春の山路、うねくと爪尖上りの、あの五條以北の山路を越して、是から、大澤峠の峻坂に掛ると云ふ時、奇麗なる溪水が、

潺々と巖間を流れておる、ア、是處にては、神も佛も、いらぬなりと吐き、傍らの岩に腰打ち掛けながら、先づ、禪關策進を出した、幾度も讀んだ所ではあるが「工夫とは何ぞ、禪なり、禪定とは何ぞ、一心なり、一心とは何ぞ、無心なり、無心とは何ぞ、無念なり(中畧)定を謂ふて、心一境性となす」と云ふ句に撞着し、聊か、工夫に就いての疑を解いた、無字なり、隻手なり、或は須彌山、或は柏樹子、皆、同じ事だ、疑ふも工夫、疑はぬも工夫、唯、是、心を一境の上に置いて、寸毫も動亂せず、嘗て聞き及んだ「さりとて、きつすいの無字」(純一無雜と云ふ俗語)に到れば良いのだ、と斯う云ふ解釋をして、左様だ、一心は無心だ、無心は無念だ、うまい、中々旨い理屈を得たと、喜びながら、徐々坂を昇り初め遂に、峠の絶頂に到着し、此處で、再び休息した、絶頂には、役の行者の



叢祠があつて、西の方、攝津、河内、和泉を一時の間に眺め、遠く、茅渚の浦より来る清風が心胸を洗ひ去つて、すが／＼しくなる、一心は無心だ、無心は無念だ、が……待てよ、其は理窟上の事で、未だ、其一心と云ふものがあるから、事實上、無心でない、隨に無心でない、此處が、所謂、工夫の必要なる處であらふと、自問自答、押つ、揉れつ、再び、降り坂へと向つた、どうしても、口先許りではつちまらぬ、實地、工夫の上でなければならぬと、遂に、歩行三昧と云ふことを工夫した、此は、予が手製の工夫で、專賣特許と、意張る程でもないが、例の、數息觀から割り出した者であつて、歩くに従ひ、足數を數へ、一より十に至れば、再び、一より繰り返へし、斯くすること、百、千、萬、乃至、億、兆、京、殆ど無盡にやるのだ、歩くに従つて、其足數を數へるに、何も造作はない様だ

が、中々六ヶ敷い者である、五百や、千位を數へて、路の五町や、十町は、旨く行くけれど、何時の間にやら、心はフツと、向の山邊の花に飛んでおる、  
 盛々として、晝尙暗き杉の森林も、雞鳴いて、炊煙立昇る山里も、何時の間に過ぎたか、一向分らず、一、二、三、四と、數へながら、餘念なく、歩いて行く中、遂に、其數もなくなつて、唯、歩るく許りとなる、一心凝つて、歩行三昧となると、哲學上の所謂、時間と、空間とを打ち消し、眼あつて見ず、耳あつて聴かず、初は、薄霧霧の如く、茫々としてあやめを分たず、終りは深夜の蒼溟の如く、音もなく、香もなくなつて、動かず、離れず、坦々、寂々、遂に、數學上の〇となる、  
 不圖、眼を上ると、觀心寺の櫻花、爛熳として鮮かに咲へ、古びた



る屋根が、ちらく〜と其間に見ゆるのは、楠氏の菩提所である、予は参拜の爲めにと立寄つた、

正成公の墓は、頗る壯嚴であつて、其後ろの森には、後村上天皇の陵もあり、草群の中には、苔蒸した墓石が、幾つともなく、あちら、こちらと倒れたり、缺けたりして、何れも、盡く、楠氏の一族、又は、股肱の文字を現はしておる、予はしばし、傍なる松の古木に、腰打ち掛け、恍然として、南朝の昔を忍ぶ事、二時間餘、

観心寺から、長野停車場迄、一里半餘りの間は、再び工夫を續けたが、今度は思ふ様に行かぬ、

堺に着いて、南宗寺を訪ねた處、蜻州長老は、當分、不在との事で、大に落膽したが、止むを得ず、其より、大阪に出で、二三の僧侶の法話を聽いて、翌日、歸路に就いたが、此歸り路の工夫が、復、面

白、

湊町から、汽車に搭じて、王寺、高田を廻はり、五條に歸る順路、随分、長い間であるから、今度は、ゴロ〜三昧と云ふ事を工夫した、

三等室の片隅に、寂然として、心を静め、喧しき汽車の、進行する響につれ、ゴロ〜、ゴロ〜と、斯ふ、ゴロ〜一枚となつた、騒がしい工夫ではあるが、随分、烈しい音響だから、能く、妄想を打ち碎くことが出来る、

ゴロ〜三昧も、竟に、何等の効をも奏せず、無益の奔走をやつて、飄然と歸宅した、自ら思ふ、此の滑稽なる、此の馬鹿らしき、手製の公案、手製の工夫は、畢竟、取るに足らざる、周章狼狽に過ぎない、公案は宜しく、換ゆべからずと、再び無字を拈提した、



### 十五、決死絶食一室に籠る

「工夫は須らく、一氣になすべし」一日、不圖、佛光國師の、三日三夜、無字三昧に入つて、遂に、彼の「一槌擊碎精靈窟」の名句を吐いた話を想起し、茲に、憤然として奮ひ起つた、彼何人ぞ、我何人ぞ、何時迄、愚圖々々して、生甲斐もなき、此の命を惜しむ事ぞ、此の意氣地なき馬鹿め、腑抜め、死ね、死ね……若、真に打徹せんとならば、氣違ひにならふが、殺され様が、自ら死なふが、親がどうならふが、家族共がどうし様が、無字一枚に巻き去つて、此身は愚か、全世界、全宇宙を無になし切り、死ぬるも無、殺されるも無、飲喰ひ、糞垂れ、總て無、佛も無、菩薩も無、師家、智識、總て無、悟も、迷も、直に、是、無となし切つて行け

と、腕を擦り、牙を噛み、猛然として、凄まじく全身の血を動かし、戦く手先を押し静めながら、一書を裁し、

道のため我もし死なばなき跡を

頼むは神と君となりけり

と只、一句を記して、國元なる一友に贈り置き、扱、都合あればとて、家族を卻け、食を絶ち、一室に閉ぢ籠つて、兀然と坐はり込んだ、

一念の透る處、何物か碎かずに措ふか、脊髄骨を堅立し、眼を拈え、両手を組んで、先づ、徐々と一刀を下した、二刀、三刀、竟に大奮戦となり、假令は、阿修羅王の荒れたる如く、縦横無盡に狂ひ廻り、或は執念深き惡鬼の、肉に噛み入り、血を吸ひ盡す如く、何物と雖も、其の毒爪毒牙に倒さざるはない、



予は趙州無字の名刀を握つて、斯の如く、死力を出し、毫末と雖も  
心眼に遮るものをば、盡く斬つて捨て、遂に、趙州の無字をも斬ら  
んとした、無字を以て無字を斬る、果して終局ありや、否や、  
「力を用ゐ及ぶ時は、力を用ゐざる處あるが故なり、意を留め得る  
時は、意を留めざる時あるが故なり」と云ふ如く、斬る無字、斬ら  
る、無、未だ、其研らんとする間は、眞に斬り得ないのである、  
斬れば、斬る底残り、殺せば、殺す底残る、如何して、無字を斬殺  
せんか、汗流れ、神疲れて、一日を了はつた、  
斬るも不可、斬らざるも不可、唯、無字によつて、何處迄もと押し  
行き、盡未來際、一念不生と、工夫したれば、無字の翼、漸々膨脹  
して、百萬里の大きに擴がり、更に又、墨を流した闇の夜に、とう  
くと奈落の底に行くかと思はれ、轉て又、浮え渡つたる秋の空の、

一點の翳をも止めざる、爽かなる境となつて来る、  
澄み渡つたる碧潭、如何なる機か、高く一刀を下したので、思はず、  
通身無字に徹底し、一刀兩斷、盡く萬相を斬り去つた、  
驚いたの、喜んだのと云つて、覺えず、大聲を上げて、椽先へ飛び  
出し、雀はちゆく、鳥はかあ、彼處にも如來様、此處にも佛  
様だと叫び、庭先へ飛び下りて、放尿したが、可笑しくてならず、  
獨で、呵呵と笑つた、

本心を其處で其ま、突き出して  
有字ともいへば無字ぞともいふ  
無といへば無字か其ま、生如來

柳はみどり花はくれない  
口から出任せ、御席に唸つたは、此の二句である、趙州の面目、決



して這裡を出づべからずだ、夜光の珠を拾つたよりも、鬼の首を取つたよりも、嬉しくてならぬ、サア、大變な豪傑となつた、家主や、家族共を捉らへて、玄義を談じ初めたが、彼等は、臣然として呆れておる、箸を倒して、箸が少しも倒れて居ないと言ひ、指頭を堅つて、大千世界が、一と打ちたと言ふ様な、幻戲をやるから、解らぬ筈だ、勿論、解つてなるものか、汗水垂らして、握つたものが、講釋や、ゑときなんぞで、解る筈がないと、意氣山の如く、再び、大澤畔を越して、界の南宗寺へと向ふ、

### 十六、東海庵靖州長老の棒喝

留守でなければ良いがと思つた、東海庵長老は、幸ひ在宅であつて、早速、面會を許された、色の白ひ、優しそうな、坊さんであつて、

子の頭をゝや、否、チロリと睨まれたが、其時已に、脚根下を看破されたのである、彼の有名なる、風外和尚の如くに、表面猫を被つて而も裡に鋭き機鋒を包藏しておるものもあるから、中々油断のならぬ者である、暫く禪堂に坐はり、纏て夜に入つてから、入室參禪が初つた、室内の事は、詳しく言ふことが出来ぬけれど、予は東海庵の作略に應じて、すらくと透過し得たが、最後に、一寸疑議して、將に、一句を吐かんとするや、否、撮一髮、長老、直に、予が胸倉を捕え、咆哮、叱咤、大棒を揮つて跨つた、予は通身汗流れ、終に、一言句も吐き得ず、殆ど所得底を打失して出た、併しながら親切なものである、麥飯、味噌汁の御馳走で、一泊したが、翌朝早々、長老の室へ闖入すると、サア、お早う、どうかなアと、



莞爾々々笑ひながら、老婆懇切、滔々雑談が初まる、

「…………お前さんが言ふ通り、柳は緑、花は紅、鶯は天でヒウーロ  
と舞ふておる、雲雀はチ、バチ、チチバチ、バチ……………」  
と、面白くやつて居るじやないか、お前さんの兄が死んだ時、何に  
なつた、白骨許りじやらふが、其時、兄が有と言つたか、無と言つ  
たか、お前さんと私と、斯うして話しておる、此が、五十年の末、  
死んで、焼いて、白灰にした時、扱どうじやらふか……………諦める位  
の、ちよる臭い話じやない、男子たる者は、すばく斬つて行かぬ  
ばつさらぬ、忠臣藏の四十七士を見よ、昔の武士は、皆あの通り、  
斯うと云ふ所で、すばく腹を切りおつた……………へ、ハ、ハ、有だの  
無だのと、畢竟、差別を離れない、有が無で、無が有だ、徳利が茶  
碗で、茶碗が利だ……………我と出れば、絶対的の我だ……………ナニ、

妄想三昧、サブ妄想三昧になつて見よ、火鉢になつて見よ……………未  
だ、眞の無字の境界になつておらぬ、併しながら、中々死切れぬ者  
じや」

と、斯様に、殆ど第二義を以て、予を導かんとせられた、東海庵長  
老は、所謂、兒を憐んで、恥を忘れると云ふ次第であらふ、そして、  
最後に、奚仲造車の話、牛過窓楯の話、倩女離魂の因縁など、種々  
難透難解の公案を提擧し、此等が逐一分明に、透過せねばならぬぞ  
と戒め、終に、挽茶の響應があつて、四方山の雑談中、往々突然と  
「オイ、あの泉水の音を止めて呉れ」隻手の音を、裏から聞いたか、表  
から聞いたか、と、不意打に引ッ懸けられたから、予は甚だ應答に  
鈍つた、

臂に奪命の神符を掛け、口は法窟の爪牙を咬み鳴らすと云ふ、老雄



に向つて、僅か馬車馬の様な、無字を以て行つたから、散々やられた、向許りを見て、左右を視ると云ふことの出来ぬ、不自由な無字だから、突然、後の方より斬つて來られた時などは、如何も仕方がない、只汗を流す許りで、長老は、予を馬車馬だと言つた、

### 十七、狂三昧

東海庵長老を辭し去つて、南宗寺を出た時の予は、氣の抜けたる幽靈の様であつて、悟つたでもなく、迷ふたでもなく、安心したでもなく、不安心でもない、一種、意思を失つたる動物の様に、漂々と歩いたが、復、何處やら、不足なる處のある様にも思はれる、嘗て、禪に首を差入れて、頗る究迫したる友人が予は今、工夫をなすことも出来ず、工夫を捨てることも出来ず、苦しくてならぬ、どうか、

工夫を取つて呉れと、泣いた事があるが、丁度、予が今、其通りで、最早、禪を擲つて、元の素人となり、洒洒落落、立派な俗人となると云ふことも出来ず、更に進んで、劫來の漆桶を打破し、殺佛戮祖の大力量を得ると云ふことも叶はず、世間、出世間の兩界に彷徨して、再び、妄想界裡に描きたる、無上甚深微妙法を尋ね、迷ひ迷ふて、嗟峨に出で來たは、五月中旬の某日、天龍寺の入相の鐘の音聲に、嗟峨野あたり立昇る烟が、何となううら淋しき、夕まぐれであつた、

明日より接心があると云ふ、丁度良い時機であつて、専門道場の大衆は、盡く、此の接心中にと、勇み奮つておる、予は大衆と共に、峨山禪師の垂戒を聴き、聽て、列を追ふて獅子窓堂に入つた、諸上座努力せよ、人身受け難く、佛法聴き難しと、朗々として大衆の讀み



出す戒文は、何となく、有がた味がある様に感せられる、此夜、予は堂内の眠静まるを俟つて、一枚の毛布を携え、そつと、専門道場を抜け出で森々として、鬼氣肌を搏つ老松の中をうろつき、或は草叢の中、或は古寺の軒下などに座つて見たが、どうも面白くないので、遂に蓮池に渡したる、石橋の上にと座を構えた、夜は段々と更け、草木も眠ると云ふ頃になれば、殆ど太古の人無き境界となつて、工夫は盲く行くけれど、時々獺などの突然寂寞を破つて、水に飛び込む音に驚かされ、屢我に歸つてならぬ、再び場所を變へ今度は山門の下に座つて見たが、追々身に泌み渡る夜の冷さに加えて、妙に蚊が唸り出す、齒を喰ひしぼり、兩掌を握つて、工夫を續くる中、門側の方より、怪しき聲して、一人の入道が、ぬつと現はれた、何物の變化かと驚きながら、能々觀れば、此なん、嘗て相

國寺にあつて、工夫を誤り、參禪の際、下駄を提げた儘、伏見迄駆け着けたと云ふ雲水、今は一の憐むべき發狂漢となつて、此の天龍寺の門側に住うのと、ア、工夫は頭を以てすべからず、宜しく腹を以てすべしだ、彼は畢竟、頭を以て工夫した結果、逆上したであらふ、實に可愛想であるが、前車の覆えるを見ては、後車の戒、予も亦、深く注意せねばならぬと、吸氣一息、力を腹底に充たして、蝦蟇の様に張つた、酷く眠氣が差して目睡む上に、右の狂僧が邪魔をしてならぬので、止むを得ず、復又、山門を出で、嵯峨停車場の前の大道中に直立したが、往々、鋏棒の様になつて、前なる田圃中へと倒れんとするので、更に桂川の畔に出で、材木の上に座つた、如何に全幅の氣力を注ぐと雖も、睡魔が襲ひ來つて仕方がない、フト、眼を張つて、公案を探ると、車輪大の火玉が、くるくると飛び



去る後より、山の様な黒坊主が、のこくと遣つて往く、身は萬里の水面に座して、金波、銀波、左右に湧き立つかと思へば、嵐山の夜嵐一陣、颯と吹き來つて、再び我に歸る、予は當時、只管三昧に入らんとするので、斯くの如く、三昧に入ることが出來ず、工夫が純熟せない、最早何時であらふと、考へる折柄、隣家の時計が二時を報じた、材木の上から下りて、吐月橋に來て、暫時、腰打ち掛けおると、纏て、天龍寺の鐘が鳴り初めた、専門道場に歸つて、洋燈の下に座した時は、丸で大病人の意思を失つた如く、心識全く杜絶し、而も六根清淨、娑婆即寂光の妙に入つて、其まゝ一睡した、

### 十八、峨山禪師の機鋒

「峨山も叱咤すれば、直に其棒を奪つて、獨體を一撃し呉れん」と云ふ勢で、英氣颯爽として入室したが、「エッ、其んな障子の外から物を見た様な事を言ふな、シツカリと徹したやつを持って來い」と、雷霆の轟く如く怒鳴られ、思はず躊躇した、其でも、尙頑として主張したので、「此の粕妄想」と一喝せられ、怖氣をふつて起ち上つた、人若し、禪の猛烈なるを知らんとせば、須らく、此の接心中の専門道場に來つて見よ、幾百の獨體、寂として端座死力を盡すも、而も未だ發明し得ざればとて、撲つ、蹴る、倒す、罵る、眞に寸毫も人情を交えず、信義を加えざる如く感せらるゝ予は一夜、傍なる一僧が、曳き出され、痛拳一打、雨中泥濘の中に突き落されたを見て、愕然としたことがあるが、是等は總て、禪門無上の親切である、即、臨濟が所謂、黃檗の六十棒を以て、老婆徹懇せりと叫んだ處である、



善哉録の提唱時、峨山禪師は左右を顧みて、冷笑一番「悟」を云ふ、ものを罵倒せられたので、予は思はず冷汗を流した、無を以つて行けば無を奪ひ、有を以つて行けば有を奪ひ、有無共に截断して進めば、復、中間を捉へて奪却し去る、峨山の機鋒は中々計られない、接心も漸く終り、大和よりは、頻りに歸宅を促して来る、因縁熟せざるが爲め、予は竟に、一の所證もなく、天龍寺を辭し去らねばならぬこととなつた、別れに臨んで、峨山禪師は、予を一室に引き、師「オオ、大分狼狽えておるではないか、どうも、お前さんの心氣は皆頭に上つて、脚跟下は全く空になつておる様だ、宜しく此を打座底に下し、譬へば、斯うして相對座する時などは、此の室内に充滿して座はり込む様、心掛けねばならぬぞ、ツマリ、話す時は腹から話し、歩るく時は腹から歩るくのだ」

予「過去の失敗が、念頭を去らないで困ります」

師「へい、其りやお前さん許りじやない、王侯でも、將相でも、

終局は皆んな失敗サ」

予は覺えず失笑し、更に

「つまらぬと云ふことを、知りつゝ心配するは、如何です」

師「人生に來つては、宜しく心配するが良い、併しながら、痛心は

せぬことだ」

予「たとひ、老師は許されぬとも、予は眞に、趙州の面目を、打破

した積りですが……」

師「よし、悟つた處で、其を棚に上げて置いては、何の役にもなら

ぬ、其んなことを言ふて、彼方、此方を飛び廻はらずと、早く故

國へ歸るが良いぞ、居所にまごついて居る様では、眞の安心も出



來ぬものだ、故郷に面目がないなどは、小人の言ふことだ。國へ歸つて、先づ安然として、其から靜に、禪を修めて御覽、必ず契當することがある」

予は如此、老婆懇切を受け、厚く禮を陳べて、暇乞をしたが、此が、今世の別れであつて、師は翌年の九月、終に、遷化せられたのである」

大和の寓居に歸つて、熟ら峨山禪師の語を考へて見ると、甚だ味がある、何の蚊のと言つた所で、畢竟、五十年が間の騒動だ、何も泥棒したではなし、自ら境界を狭くして、知らぬ他國にさまよふよりも、一先歸國して、家族をまとめ、母を養ひ、山水樂しき故郷に於て、徐ろに安禪を修するが、寧ろ徑路ではあるまいかと、斯う思慮して、國元なる知人共へ其旨を謀つた處、彼等は大に喜悅贊同の意

を表し、或は書面、電報を飛ばして、早く歸れ、善後の策は如何様にも講じてやる、君が無事なる顔を見て、昔提げで出でたる無字を如何にせしかを聽かんと樂を、待ち居るなど、言ひ贈つたので、予は、大阪以來、商業上に於ける失敗を憾むよりも、予の未だ全からざるを慨いた、

### 十九、再び南宗寺に苦戦す

超えて七月上旬に至り、竟に斷然、行李を整へ、大和を引き拂ふて、歸國の途に就くこととした、家族を率き連れ、大阪川口に出で、一同を船に上らしめた後、予は一人引き残つて、同地に止つたが、胸中大に期する處あるので、同夜遂に、堺の南宗寺へと走つた、名利に迷ひ、悟に迷ひ、東奔、西走、漸く一段落を告げて、南宗寺



に着いた時、東海庵長老は如何だ、未だ脈があるかと問はれた、逆も駄です、誰か、頭から熱湯を潑せて呉れ、ば良いかと言ふと、なせなせ、死んではつもらぬではないかと翻弄はれ、イヤ、寧ろ死なねばつまりませんと争ふと、長老すかさず、今、現に死んであるではないかと拶着し、予は思はず、くるくると眼を廻はした、最後の決戦、國への土産と云ふ積りで、南宗寺に滞在し、晝は、大濱公園の小高き丘に上り、草原の中に坐はり、夜は渡邊の網小屋に入つて、工夫を凝らした、往來の人は、不思議想に予を眺め、巡査は、怪しき者と咎める、工夫が悪い故か、どうも大三昧に入ることが出来ぬ、如何に苦しむでも、兩筒となつて、所謂萬物一馬の境界に入ることが出来ぬ、一日、客室に坐はつて、恰も餛飩粉を練る如く、延べては捏ね、打

つては丸め、前後、左右より、箇の一着子を揉んだ末、ソフト、兩眼が飛んで、塵は落ち、覺えず、双肩の重荷を卸した、アツ、斯んな事であつたが、最早大丈夫だ、今後、決して長老の瞞着にかゝることはないよ、故らに參禪を急がず、先づ大濱公園へと散歩に出懸けた、身は鳥の籠より離れ出たる姿となり、洒々、落々、無礙自在に行はれて、萬物盡く我が物となつて來た、今迄、何を苦んで、何を探して居つたのであらふか、大笑ひながら寺に歸り、長老我を如何せんと言ふ勢で入室した、「どんな道理を見た」と長老の一拶に「理窟はない」と喝破するや、「大變な理窟を言ふではないか」と反撃せられ、一寸驚いたが、直に陣立を直して「最早何も言はぬ」と空嘯けば、横着なる長老「オヤ復言つた」と吹き出す、何など勝手言へと澄し込んで、無言を控えておるも「オム、大層黙つてお



るではないか、其で善いと思ふのか、せ皮肉にやられ、予は佛然として「何が悪いです」と喰いかゝる。長老「其位に満足して、最早國へ歸へるのか」と柔かに誘ひ出す。予は、其様です、山は山なり、川は川なり、怒る時は大に怒り、笑ふ時は大に笑ふ迄です」と答へた。「左様都合克く往けば良いが」と、長老の一睨に聊か引懸る所のある様にも思はれたが、思ひ切つて「大丈夫です」と言ひ放ち、謝禮を述べ、後をも顧みず、飄然と歸國の途に就いた。

### 二十、殺活不自在

大阪より乗船して、海路瀬戸内を過ぐる時、舷頭に立ち、千波、萬波の生滅し停まざるを見て、計らず、白隱禪師の「生死涅槃、飛鳥の跡」を刻みし、復、一層の太平を得ることとなつた。

廣島に上陸して、某旅館に投宿した時、ふと、憶ひ起せば、昔嘗て一美形を買つて一夜の酒に、浮かれたことのある家だが、當年の風流才子は、今や端嚴の活佛となつて、酒も飲まず、贅言も吐かず、一言、一動、甚だ真面目に、穩かとなつたから、旅館の女なども、無下に淫がまじさることを言ふ餘地が無つたと見ゆ、少しも馴れ敷くせず、敢て又、輕侮もせなかつた、廣島より石州へ通ふに、可部坂と云ふ峻嶮なる徑路がある、予は此の間道を取つて、今や三里の坂を八分自迄登つた時、上の方より、十一歳許りの男の兒がすたくと下つて来る後より、八歳餘の弟らしき者が、後れじと急いで、馳せて來たが、確と倒れた「待つて呉れよ」と、泣聲を出したを見れば、汗たらりと額に流れ、一種云ふべからざる可憐の面持を以ておつたので、予も殆ど泣き出して、助けやらうと思ふ内、へき、起き



上つて、再び「待つて……」と嘔け出し、帯曳すりながら、山の小屋に隠れた。予は思はず、「孤兒」と言つて、再び潜々と暗涙を催ふした。予は性來、斯はかりの事に、涙を流す様な男でもなく、已に禪門に於ても、心膽を煉りたる後であるなるに、道は畢竟、物に奪はれたのであらうか。將又、慈悲三昧に入つたのであらうか、と自ら點檢した。物は奪れたでもなく、慈悲三昧に入つたでもない、予は故國に於て、一人の姉の子と、一人の兄の子と、丁度、二人の甥を持つておつて、何れも、父なき孤兒で、今や門に倚つて、予の歸るを待ちおるとの事であるからな、一時の……泣く時は大に泣け、巫山巖る時は大に巫山巖る、と云ふ、予が無

字は、歸國の上、如何に働いたであらうか、さうながら、歸國後に於ける予が世間門の活動、即俗事に執掌したる顛末は、詳はしく書くことが出来ぬ、何となれば、其餘りに醜態を吐露し、秘事を暴露して、而も、工夫上、左迄の必要もない事であるから、なれど、存體に白狀すれば、當時の予は、一種の禪的ハイカラであつて、天龍、相國、南宗寺等に於て、煉つた「無字も極る俗世界に於ては、殺活自在に行かなかつたのである、東海庵の「そう都合能く行けば良いが」と言はれたは、能く適中した、

### 二十一、安國寺の法戰

其處で先づ家事を整理して、早速、例の安國寺を叩いた、恰も、勇士が戰場より歸つて、彼地の戦功を語るが如く、大阪以來の葛藤も



物珍らしげに、媿々纒陳した處か、盤山長老は、聊か寝めもせず、感心もせず、「ア、今晚は泊るが良い」と言はれ、「少し拍子抜がした、

夜の讀經が済んで、夜食が了るや否や、長老、漆黒の竹篋を持ち出し、「こちらへ御出で」と、本堂へ伴はれた。「サア来た」と、身構へしたが、其の身構へした處で、已に收關を取つたのである。涼しさ椽先に對座するや、長老「趙州の無字は如何じや」予「無ッ」長老「其無は何處から出るぞ」予「無ッ」長老「無と云ふものが、有るでは無いか」予「否、有る無いは離れてある、唯是、無ッ」長老「それ、其があるではないか」と突つ込まれ、予は殆ど、毒手に觸れんとしたが、尙剛然として「何と言つても、何處迄も、無ッ」と突つ張つたので、長老呵々と笑ひ、予も亦、思はず失笑した「其んなと

ではつまらぬ、明日迄てやつておけ」と、其ま、寢室に入つて仕舞はれた、翌半日程滞在したが、面白くないので、竟に、午睡中を伺ひ辭し去つて、歸路に就いた、後に長老目を覺まして、今逃がしてはと、誰僧に追はしめられたそうなれど、終に及ばなかつた、其後、予は再び食を斷つて、郷里で有名な、星高山と云ふ高山の絶頂に上り、正念相續を識み、或は父兄の墓所に立つて、觀經三昧に住して見たが、小悟の續出するのみで、幾度も變つて來ても、皆、同じ事である、

### 三十二、盲師家と盲修行者

禪學談、工夫談において、予は、故國に二人の知己をもつておる、



一人は予の姻戚に當るもので、虎禪と號し、其名に反し極めて温厚なる青年だが、嘗て相國寺に於て、一冬を終つた者、他の一人は、予が同郷の友人で、自ら拙劣小僧と號し、未だ正式の參禪などやつた事はないが、其拙劣と號する丈け、其丈け巧妙で、其巧妙が餘り深かつたので、終に落魄、失意、今や、蘇石の國境に近き山間に彷徨ひ、纔に溪川に釣を垂れて、心源を養つておる、七月上旬、苦熱熾くが如き日、予は拙劣小僧を訪れて、江の川を遡り、石路羊腸、山人を呑むと云ふ難所を越え、漸く彼が寓所に到達した、拙劣手を拍つて拙を迎へ、「君、此處へは夏が來ないよ、見玉へ、冷たい風はこの通りに吹き、裏なる筧の水は全で氷の様だ、而も、前なる溪流には尺五寸餘りの鯨もあるぞ」と氣焔を吐き初め、話頭は、三轉、五轉して、竟に理屈禪に移り、彼も、予も、興に乗

此江、殆ど對話三昧に入り、或は向上一路の關鎖を拈り、或は直指端的の愛用を驗し、更にあ、一昔の懷舊談となり、冷眼一世を罵倒するなど、法螺と、悟と、熱と、自慢の春さ合せで、夜の十二時を覺えず、過ぎて、曉て、雞が鳴き初めたので、一睡した、妄想と談話は、限りのあるものではないが、昨夜の氣焔で、大半冷脚し、沈靜したから、翌半日は釣遊にと出懸けたが、午後歸宅の上、拙劣は竟に節を屈して、朝に趙州の無字を問ふた、予「君、即今、無字を提擧して見玉へ」拙劣乃ち「無ッ」と長く引く予「其處じや」拙劣「でも無と言ふ物と、其無と、二ツある予「今一回」拙劣再び「無……」と、言未だ終らざるに、予「ソレ、後から解釋してはいかぬ」と言ふや、拙劣遽然として予を抑へ、「君、予は今、眼がゆらゆら」としたまふ、光つたよ」予阿々と笑ひながら「もう駄目だ、考へ



たつてのまらぬ」といふ。……  
 盲者が、盲者に文字を教えるとは、此事だ、予は未だ般若の正眼を  
 開かずして、友人に向つて、禪を教へるなどとは、真に滑稽だ、併  
 しながら、世間には、斯んな例が澤山あるかも知れぬ、……  
 拙劣の留むるをも聽かず、予は歸路に就いたが、分れに臨んで、彼  
 は三里餘も予を送り、途すがら工夫用心の事を質した、予は「唯、  
 何處迄も、棒の如くやれ」と言ひた、……でも、喜怒哀樂の境界に妨げ  
 られた時は如何」と反問したから「尙、無と云ふ棒で押倒して行く  
 のもや」と答へ、安國寺同伴を契約し、終に袂を分りた、  
 歸宅の後、半ヶ月餘も立つと、拙劣は、一書を寄せた、予は一見し  
 て喫驚した、其は斯う云ふことが書いてある「予は昨夜、遂に大死  
 底に撞着して幽靈となり、思はず、起つて天地四方に禮拜した、實

に億萬の寶を握つたよりも歡喜に堪へぬ」と、  
 見性したのであるう、どんな無字を握つたであろうか、と待つて居る  
 と、八月上旬、忽然として、拙劣は予が宅を訪づれた「どんな無字  
 を握つた」と尋ねると、彼は眼をパチクリさして「一度は慥かに死  
 んだけれど、どうも、事と、理と、圓滿に調和せぬ」と不足を言ふ、  
 予は「其んな物だ」と同感を表し、予、彼が露骨なる口調もて、煽  
 々と饒舌るを聽けば、中々面白いことを言ふ、  
 「……烈しく無字を拈提して、幽玄に達すると、無字が腹の底で、  
 玉の様となり、段々小さくなつて、終に肛門の穴から、スボリと消  
 え去る、不圖、傍なる妻の顔を見ると、唯、妻の顔許りとなつた、  
 ……ツマリ、手元に何も無いから、物がハツタリと映るのじや」  
 と拙劣は熱心に語る、予は「左様じや」といつて微笑する、と彼は



最と眞面目に「君は、死ね々々と云ふけれど、斯うして居る間が、已に、死につゝあるのだ」予は「即ち、生死一如かね」と冷かし、二人は相見えて、哄然大笑した、

### 二十三、禪の安賣

八月五日、兩人は相携へて安國寺へと参じた、此の行、予は盤山の爐竈によつて、遂に、十數則の公案を打破し、拙劣及山内の僧侶をして、舌を卷かしめた、と云へば、如何にも、威風凛々、江湖を併呑する概ある様だが、實は、實際は、老婆懇切なる盤山長老に、手を引き、腰を押されて、自分も亦、雞鳴狗盜、纒に關を過ぎたと云ふ、危い仕業であつたから、其眞物であつたか、如何だかは、甚だ疑しいことである、

ツマリ、露骨に言へば、予は盤山長老から、禪をならつたのである、禪をならつて、公案を透過することが出来るかと云ふに、随分出来る、斯く言へば、向上の英才は、天を仰いで阿々大笑し、未透底の士は、奇異の面色をなして、訝るであらうが、予は實際、其様であつたのだ、且又、世間にも、間々左様云ふことがあるかも知れぬ、阿々、

如何して禪をならつた、如何して公案を打ち破つたか、果して其の効果があつたか、室内の事を他言するは、禪門に於て嚴禁である、然も、予は其を公にして、理窟悟の他日其身に益なきことを吹聴し、老婆禪の畢竟つまらぬと云ふことを證明せんとした、なれど、竟に盡く、其の草案を塗抹削除せねばならぬこととなつた、敢て、佛敵、法門の逆賊などと、世の批難攻撃あるを恐れた譯ではないが、盤山



長老の厚恩を憶へば、如何しても書けぬ、唯、當時の記録を抜摘して、其差支なき限りの一部を掲げて、此の稿を終らうとする迄である。

### 二十四、參禪日記拔萃

八月六日、盤山に參じて無字を呈す、盤山、隻手を差し出して「此處へ出せ」と迫る、予滿身の勇を振ふて一掌を加ふ、長老、予が顔を凝視して「やみの夜に鳴かぬ鳥の聲」を問ふ、折柄、蛙飛んで庭前の泉水に落つ、予乃ち、芭蕉の句を提擧す、長老曰く、蛙果してしか言ふかと、予覺えず省得し、是より理會縦横、懷州の牛禾を喫すれば益州の馬腹張る、空手にして鋤頭を取り歩行にして水牛に乗る、

人は橋上を過ぐれば橋は流れて水は流れず、

富士山絶頂の隻手、

夢中の祖師西來意、

四十九曲細山路を直ぐに通らるや一分立たぬ、

風の色香はどの様なものぞ、

千尺井中人あり如何か救ひ得ん、

等の公案を透過し、竟に廓然無聖の句に到る、

廓然無聖の一句、千古の利及、何人も能く之に向ふものなきに、然も予は僅々、十日の日子を弄して、透過し去る、豈又妙ならずや、是亦雞鳴狗盜の術、

八月二十三日、拙劣と手を携へて盤山を辭す、拙劣も亦、無字隻手を透過せしなり、予や當時、眉昂り、肩聳へ、一世を睥睨するに、



總て痴兒の行動するが如し、  
味噌の味噌臭きは良味噌に非らず、悟の悟臭きは未だ眞の悟に非ず、  
果然、九月中旬に入り、予は猛烈なる肝臟病を患へ、病苦腦亂、日  
夜を分たず、醫も亦危ぶむ、從前の所得、毫釐も効なく、徒に、田  
夫野郎に對して、掌を合せ、只管生を乞ふのみ、傍人謂らく、禪又  
何の効あらんと、十月上旬、虎禪來る、時に苦惱稍と退く、予乃ち  
告ぐるに實を以てし、「君願くは、予が爲に盤山老師に問へ、師が可  
する所の會解總て病中の苦を救はず、豈又、生死を解脱するを得ん  
や、我甚だ之にふ惑ふ」と虎禪諾し去る、  
續いて拙劣又來る、時に病苦大に去り、横臥して談笑するを得たり、  
會々酒客あり、來りて拙劣と議論を上下し、且つ飲み、且つ論じ殆  
ど立を弄し、妙を探ぐるの慨あつて曉に徹す、予思へらく、奴輩、

喋々徒に趙恪の兵を談す、異日必ず、危急に臨んで、總て悲泣せん  
のみと、翌日、酒客去るや、予拙劣に語るに「理想上の悟道、誠に  
泡沫の如し、水火交々迫り、生死急に襲ひ來るの實境に當つては、  
寸毫の益なけん、予等、宜しく眞參、實悟、眞に命根を截斷して、  
而して相應せずんばあるべからず」と、拙劣嘆じて曰く「ア、然る  
か、發心は宜しく生死より入るに非ずんば、我は堅からざるものあ  
らん、予は誤てり」と、乃ち臘八を期して、再び共に安國寺に參せ  
んことを約し去る、  
病痾去つて、健康に復するや、虎禪、盤山の答を齎らして來る、其  
説く所、予が所見に超えず、予は此より、白隱禪師の法語、並に夜  
船閑話を讀み、

一喉を以て息する勿れ、踵を以てせよ、



一 心氣を養ふものは常に黙す、

一陽上にありて陰下にあるは秋の氣なり、人之を得れば死近きにあり、陰上にありて陽下にあるは、冬及び春の氣なり、人之を得れば福壽圓滿、

等の語を工夫し、内觀の眞修を積む、隣人皆曰く、顔色日々に美しと、一日、窓を開いて、一峯の突兀たるを見て、計らず大我を把握す、又、兒童の面を熟視して「是れ猿にあらず、是れ人にあらず」と失笑し、或は又、醫家に赴かんとして、下駄を履へし、老子の所謂「無名は萬物の母」なる語を觀する等、斯くの如きの小悟、日々に續出して、幾回なるを知らず、然れども、如何せん、神經過敏にして、喜怒計られず、往々物に轉せられるの恐ありて、爲に、寂寞無人の境を好むに至る「驚○悲○妄○りに○起○る○は、上○心○定○ら○さ○る○が○故○なり」と

此に於て、再び拙劣と伴を結びて、安國寺に參す、時恰も、三十三年一月二日「盤山乃ち、一條の竹篋を拈じ「呼んで竹篋となせば即ち名に觸る、呼んで竹篋となさざれば即ち名に背く、即今呼んで何となす」と、

是れ、首山が竹篋背觸の則なり、予茫然として窮す、盤山乃ち、竹篋を以て予が頭に觸れ、鬪聲一番、罵倒して、頭蓋を破碎せんとす、予或は唱し、或は竹篋を奪ひ、種々の作劃を盡すも、盤山總て許さず、所見を呈するに當り、盤山の老婆を受けて、纒に透過し了る、金剛經の「諸佛の阿耨多羅三藐三菩提は、皆是の經より出づ」と云ふに至り、予遂に、老僧を櫓下に突き倒す「香嚴上樹」の則を處するに當りては、白晝、大道を行くが如し、盤山亦、大に喜び、頗る賞揚す、サレド、予が顔を熟視して曰く、「汝が知を許す、汝が會を



許さず」と、

此參禪日記は、予が盤山長老に參せし、當時の筆記であつて、如何にも、元氣そうに書いてあるが、心ある人は、一讀して、苦笑せらるゝに違ひない、以來、予の精神が、如何に活動し、品行が、如何であつたかは、書くも恐ろしく、恥かしひ次第である、予は時々、夢に、羽を生やして、虚空を翔るとがあるのだ、

### 二十五、釋宗演師の頭ごなし(禪がない)

去年、東京に於て、圓覺寺管長、釋宗演師に逢つた時、頭ごなしにやられた、予が様な禪は、一掃に掃き去つて、裏の溝渠に棄て、仕舞ふが良い、予は斯う思つて居るから、目下禪が無いのだ、阿々、

(完)

## 附 録

### 一、山梨平四郎

(白隱禪師書翰)

道情も進み勇猛精進の助けにも成るべき法語等これあらば、書付候やうとの御事、毎度申しこされ侍れど、廻りたる假名物の法語などは、年來見及び、聞き及ばれたる事ともに侍れば、今更書付け進するに及ばず、申し進すべき事に事を缺き、彼是れ見合はせ侍りけるに、此の程珍らしき法語これありきと思ひつき、荒増し書載せ進し候。毫釐も添減これなき物語に侍りぬ。少しも疑ふ心なく披見いたされ、勇猛精進の一助ともせらるべく候。子細は老父去年の秋、雲水僧侶の頼みによりて、當國松岡といへる處において臨濟録提唱し



て侍りけるに、聽聞の鐘徒、東西十三里、北は甲州境を限りて、毎日聚會し侍りき。中に就きて五六里西菴原と云へる處の人々、別して信心に聽受せられ、散筵の後に、三五七人伴を結びて晝夜おこたらず、辨道工夫心の長に勵み勤め、垂誠をなん請けて侍りてんと、老父が方へも見え來りける。人々もまゝ此ありつる中に、山梨平何某と云ふ聞えける、その所にてもおとらぬ豪家の主なるが、此の男ばかりは、人々諫め勸むれど聽受けたる氣色もなく、坐禪などは存じも依らず、去る物語などする席をば、竊かに遁げ走りこすれ、修行などせんとする者とは、つゆ見えざりけるほどに、人々も此の男には點をなんかけて見限り置きける。その噂は老父の方へも折りくは聞え侍りき。先月の二十四五日の事にや侍らん、人を以て案内しけるは、菴原なる平何某にて侍る、和尚の瞋拳をけがし

奉つらんとて推參申したるにて侍る、然るべく申しなして、見參に入れてたべなど、用がましく聞えける程に、愚老も立向ひ、珍らしや不思議の來訪に預り侍る、仔細や候ふべき、疾く入り給ひてよと答へければ、顔色の勇狀なる、言語の折目たかなる見えたるばかりに低頭作禮して告て曰く、人がまじき入室、事をかしくおぼさんも恐れあれど、平が身に取りては、老師ならでは點檢し玉はんずる方も覺えなさま、河々の水かさおち、渡頭の各々禁渡牌をひくを待かね、推參仕りたるにて侍る、扱ても去年の秋、松岡の大會の後、我等の父老七八輩、互ひに伴を結び志を合はせ、晝參夜參、見る人感心するばかり貴とく覺え侍り。斯りける中に御覽の通り日頃平が陋懶なる、工夫は存じも依らず、一枝半枝の坐禪さへ、終にかゝまり居たる覺えこそなけれ、修行の望みなどはおつと最初より思ひた



え侍り、下郎が心に竊に謂らく、夫れ見性の大事は、禪門英傑の參徒、頭腦を鍊り身臂指を燒きて、十年二十年するすら、少分の相應も得がたしとこそ聞き及びたるなれ。況や平か蒙昧昏愚なるをや。迎も仕課すまじきとを強ひて取りかゝりて、果は人々に後指さされんすらん。むげに口惜かるべき。遂げまじき事はせぬにしかず。左ればとて空しく光陰を送らんも、淺ましく腹ふくるゝ、心地すれば、今日より密かに陰徳を冥々の中に積み重ねて、以て子孫長久の計をなすべし。是れ平が分を知りたる悟なるべしと思ひ定めて、夫よりは忍びくゝに徳行にもなるべき事ともを、毎日二品三品乃至十五二十に限らず、ぬけつくゝりつ勤進しけるほどに、人々の坐禪せよ工夫つとめなど勸め導びき玉ふは、結句かたはらいたく、人々のさる物語など仕出すれば、隙を見付けて、遁げくゝり侍りき。實に時

節因縁と云へることに侍らん、昨二十一日の晩がた用事ありて、さるものの許へなん行きしに、主なる者、椽鼻の柱に後さまに寄りかゝり片膝立て、左の手をばゝつゝ突きて、右の手に何某法語とかや云へる假名草紙の真中かゝい掴みて、首打ち傾け、如何にも殊勝にあいらしげに聲つくろいして、前後を忘れはるはると涙ぐみ讀みて居たる、蟲睡走り胸悪しかりけるが。さやつも亦人々の中間入りして、屏風引廻し欸冬味噌喰たる顔してそら眠せんする下緒なるめり。筋なき後世物語を讀ませて、あつたら光陰を空しく送らせんより、手頃に似よりたる學者なれば、一所二所聞きとがめて打つて落し、吾が家秘傳の徳行に引き入れ、一品二品の善事執行なはせたらんには、是れまた上もなき徳行ならめと思ひ定め、笑ひながら驚歩してさしより、軒端に腰うちかけて、落度あらば聞き出さんと、耳を



澄し目を閉ぢ、手組して聞き居りけるに、彼の法語に書かれけるは、夫れ見性の大事は、二年三年にして打發するあり、又二十年三十四十年歴るもあり、また一生打坐して打發すること得ざるもあり。若し人精神を憤起し、目を張り牙關を咬定し、即今見聞覺知の性、何れの所にか在る、是れ青黃赤白なりや。内外中間に在りや。是非く見とゞけずば置くまじぞと勵み進まんとするとき、妄想の競ひ起ると潮の湧くが如けん、此の時少しも屈せず、單々に進みて一人と萬人と戦ふが如くし去らば、通身汗流れて黑暗萬丈の大深坑に落ち入るが如く心身ともに打失して、呼吸の氣息も亦泯絶し去らん。この時に當りて大事を決定すること、睡夢の初めて醒むるかごとく、豈に幾多の時日を歴るに及ばん。この故に起信論に曰く、勇猛の衆生のためには成佛一念にあり、懈怠の衆生のためには、涅槃三祇にわ

たると説き給ひぬ。時々思ひ出して、二炷三炷の坐を打し、或は規矩を定めて、毎夜五炷六炷の香を守る。是れ等の類をみな是れ懈怠の衆生と名く、傍はらより打ち見えたるは、如何にも殊勝に費とく、自らも天晴懈怠せず退屈せずと思ふたれど、如何にせん、只だ是れ命根斷えず、たとひ恁麼にして三祇劫數を歴るも、見性は存じよらず、自救もまた不了なるべしと讀みつゝくるを、つくづくと打ち聞きて、心にひそかに思ひけるは、不思議のともあらんなれ、このこともし一日二日乃至三日の功勳にして、少分の相應を得るとならば、豈に一鞭を加へざらんや、得力ののち、舊によりて彼の徳行を勤めたるんには、虎にして翼ある者ならんか。若人一日の功にして得るとならば、われ七日の功を積まば豈に果さざらんや、男子たるもの思ひ立ちたる事を遂げずや置くべき、仕果さずやあるべきと、思



ひ定めて宅に歸り、日の暮るゝを待かねて、一室を閉ぢ厚く坐物を  
 舖いて、結跏趺して凝然として坐すれば、しばらくありて妄想の競  
 ひ湧くこと、八島の戦ひのごとく、九回の亂に似たり。此に於て精  
 神を震ひて、妄念と相戦ふ。たとへ猛將一騎にて數千騎に取り圍ま  
 れたらんに、大喝一聲一方を突き破りて、馳せぬけんと挑み勵むが  
 如く、又萬仞峻崖の高山に登るべきに、半途にして突き落さるゝが  
 如し、彼の者勇猛の氣力ありて、蹈みしめ争ひ登ること、七八分に  
 して突き落され、八九分にして蹴落さる、突き落さるれば逆ひのば  
 り、逆ひ登れば突き落さる、此時一身の氣力を盡くして、勵み進む  
 とき、覺えずこうくとして苦み惱むこと犢牛の病にうめくが如く、  
 眼を見張りて目蓋はなれ、齒をくいしばりて、齒牙碎け落んとす。  
 忽然として大風の乍ち止むが如く、一鍋の沸湯に一杓の冷水を洒く

が如く、命根截斷する事、紡車の緒の切れて飛ぶに似たり。此時に  
 當つて大地黒漫々、是れ生なりや是れ死なりや、自ら都て分つこと  
 能はず、呼吸の氣息一點もまた無し、生氣を打失するもの數刻、正  
 に天明に到らんとする頃はひ、纒かに大母指陰々として、痛むこと  
 を覺ゆ、忽ち蘇息し來れば、その痛み忍ぶべからず、是れは嚴しく  
 定印を結ぶ故に、二指さゝえて指頭の痛めるなり。急に定印を解か  
 んとすれば、四支すくんで動くことを得ず、涕涙流れて額に滴たり、  
 兩眼開き張りて目たゞさすることを得ず、喜ぶ處は胸襟分外に清涼、  
 分外に皎潔たること、雲霧を開いて旭を見るが如し。然りといへど  
 も一點の所得なく一點の所知なし、是れ悟りなりや、是れ迷なりや、  
 人々に對して一事の説くべきなし、たゞ何となく大歡喜の心のみあ  
 りて、既に天明に到る、人々に對すといへども、目眩し口健忘の人



の如し、家人且つ悲しみ、且つ怪みて、是れを問へどもたゞ目を張りて是れを見るのみ、朋友來りて蹴鞠の場に誘ふ、平即ち伴ひ行き、諸友の中に入れども、人事せず低頭せず、たゞ目を張りて癡坐するのみ、諸人みな怪しむ。自ら謂へらく、誓て此度徹底の力を得ずんば、死すとも休せじと。日暮を待ちて再び又室を閉じて兀坐す。妄想と戦ふこと昨夜の如し。奮に依りて齒をくいしばりて目を張り自ら謂へらく、傍人ありて燈火を點じて、吾が面を見なば、必ず夜又のごとくなるべしと。既にして單々に相進めば、久しからずして再び彼の境に入る。出入の氣息一點もまたなし。前後截斷し身心脱落して大死一番入靜なり。天明に到ること、只片時の如し。忽然として蘇息し看來れば、天地一指、萬物一馬、上片瓦の頭を蓋ふなく、下寸土の足を卓するなし、此の外何の禪道佛法かあらん、覺えず呵

々として大笑す。歡喜のあまり遙に來りて參禮するのみ。更に一句も和尚に對して呈露すべきなし。途中肩輿にて薩埵峠を過ぐ、遙に南溟の浩渺たるを見て、はじめて草木國土悉皆成佛といふことを徹見す。請ふ師願はくば點檢せよ。予が曰く、即今佛何れの處にか在る。平即ち露柱及び庭階を目視す予直に手を拍して曰く、兩掌相觸れて聲あり、却つて隻手の聲を聞くやと云いて一掌を立つ。平が曰く、聞得て分明なり。予が曰く、何を以てか驗とせん。平即ち良久す。曰く、聞くことは即ち甚だ聞く、唯半片を聞得たり。平即ち耳を掩ふ。予が曰く、猶ほ是れ未在。平拂袖し走り出づ、行くこと三五歩して却回して曰く、聞得たり。予曰く、作麼生。平即ち所解を演ふ。甚だ諦當なり。予が曰く、時はれ細雨連日、懶如何か留め得て一滴も泄らさざる事を得ん。平が曰く、未生以前に止め得たり。



予が曰く、往々に恁麼に云ふ。平即ち疊を打つこと一掌。予吹くと  
 と兩三吹して、今作家に觸着すれば坐上大に塵を惹く。平又低頭  
 して出づ、須臾にして歸來りて曰く、和尚の爲に十方刹土の細雨を  
 止めて點滴もまたもらさず。予が曰く、作麼生、平即ち所見を演ぶ。  
 予微笑として笑ふ。平歡喜にたえず、走りて惠昌禪尼の庵室に入り  
 て前話を擧す。尼が曰く、居士少しきを得て足れりとするとなかれ。  
 老尼今已に衰毫せり、人を得ざれば起つことを得ず、願はくは居士  
 隻手を動かさずして、尼をして起しめ得てんや、平茫然たり、尼が  
 曰く、居士早々なることなかれ、向きに云ふことを聞かずや少きを  
 得て足れりすとすと、平慄慄して寺に歸る。尼も亦隨ひて寺に入り來  
 りて、前話を擧して相賀し且つ大笑す。平忽然として入りきたりて  
 曰く、適來錯りて敗闕を取り了る、願はくは大姉再び問ふこと一遍

せよ。尼即ちいはく、居士願はくは隻手を動かさずして、老尼をし  
 て起しめよ。平即ち所見を演ぶ。尼大に驚きて舌を吐く。予即ち青  
 州布衫の話を授與して曰く、祖々相傳底の秘訣なり、謹で仔細に參  
 究すべし。容易にすることなかれ。平即ち禮三拜して辭し去る。

右菴原の山梨平何某、纔かに一二夜の苦吟に依つて大事を發明せし  
 こと、會元にも傳灯にも聞き及ばざるためしにて、眞に去ぬる五月  
 二十一日の夜の事に侍る。返すくも最初の入理は急切に勵み進む  
 に越へたることはあるべからず、時々思ひいだして少しつゝ相勤  
 むる分際にては、中々三四十年を歴るとも、見性は存じも寄らず、  
 月日を重ねるに隨ひ、次第に疲れよわりて、妄想情念に勝つこと能  
 はず、果ては念珠打ちつゞくりて、打泣き打泣き念佛するより外は、  
 是れあるべからず、虫歯の藥にもならざる修行なるべし。誰れにも



せよ二度三度も呼吸の息も絶え果て、自ら生死を辨まへぬほど勵み進まざれば、しかとしたる得力は、努々是れあるべからず。縦ひ一旦國地一下の得力これありて後も、動靜の二境を嫌はず、正念工夫の相續肝要たるべし。次に燈籠跳りて露柱に入り、佛殿走りて山門に出で、人は橋上より過ぐれば、橋は流れて水は流れず。南に向ひて北斗を見る等の語話、掌上を見るが如く分明に見得すべし。而して後に最後向上の一着あり、之を法窟の爪牙奪命の神符といふ。謂はゆる疎山壽塔の因縁、南泉遷化の話、鹽官犀牛の扇子、翠巖夏末の話、乾峯三種の病、是れ等の因縁逐一透過し了りて、萬里の異郷に妻子の面を見るが如くならざれば、即ち真正參立の上士と稱することと許さず。右菴原の一件聞きおよびたる人々は、僧俗ともに俄かに精進勇猛の精神を振ひて、勵み進むこと前日に十倍し侍る。

然らば則ち是に過ぎたる法話はあるべからずと、荒増し書付進上。文字の烏焉、語路の謬も多く侍れば、努々他見之れあるべからず。穴賢。

## 二、盤珪禪師垂示

(圭旨軒眼目)

唯今皆の衆は、いかい仕合なことでござるわいの。身どもが若い時分は、明知識がござらなんだが、ござつても不縁でお目にかゝらなんだか。殊に若い時から鈍にござつて、人のしらぬ苦勞をしましたぞいの、いかいむだ骨を折りましたわいの。そのむだ骨折つたことか、今に忘れませぬ、身にしり、こりはてましたほどに、それを思ひまして、唯今皆の衆には骨ををらしませず、疊の上で樂に法成就させたまに、精出しまして、毎日このやうに催促しますことで



ざるわいの、これにつけても皆の衆は仕合なことにやと思はつしや  
 れい。このやうなことが、又どこにござらうぞいの。左様じやござ  
 らぬか、身ども若い時分に鈍にござつて、むだ骨を折りましたこと  
 を、皆の衆に話して聞かせましたうござれども、若し自然若い衆の  
 中にも、身どもかやうに、むだ骨ををらにや法式就ならぬと思はつ  
 しやれて、骨をらしませれば、身どもが咎でござる所で、話して聞  
 かせたうござらぬども、去りながら若い衆よく聞かしやれい必ず身  
 どもかやうに骨をらいでも法成就しますほどに、先づ左様心得て聞  
 かつしやれ、それで身どもが骨折たことを話して聞かしますわい  
 の。

身どもが親は、四國の浪人でござつて姓菅而かも儒者でござつたが、  
 此處干綱に住みまして身どもを生みましたが、父には幼少で離れまし

て、漸く母の養育で育ちましたが、こゝらかいほうで總ての子供の  
 大將してゐるい事をいたしたあつぱく者でござつたと母の話しまし  
 た。去れども二三歳の時より早死と白すことが嫌ひでござつたと云  
 ひました。それ故に啼きますと、人が死んだ時のまねをして見せま  
 すが、人の死んだことを聞かせますかすれば、つい啼止みまし、悪  
 いとをしましても、つひ仕止みましたと白す。漸く成人しまして、  
 身ども、師匠取しまして母が大學の素よみを習はせまして、大學を  
 讀みます時、大學之道在明明徳と白す所に至りまして、この明徳と  
 云ふことが疑はしくござつて合點が行かず、すみませいで、久しう  
 が間、この明徳と云ふものを疑ひましたわいの。去る時、儒者衆に  
 問ひますれば禪師十二三この明徳と云ふものは、いかやうなるもの  
 ぞ、どのやうなが、明徳と云ふたものぞと問ふてみましたれども、



どの儒者も知りませぬ。ある儒者の白すは、そのやうなむづかしむことは、よく禪僧の知てゐるものじやほどに、禪僧にいてお問やれ。明徳のことは、我等が家の書に出であつて、日夜朝暮口では文字の道理をもよく云へども、明徳と云ふものは、どのやうな物か明徳といふものやら、實に我等は知らぬと云ひまして、埒が明きませぬだゆえに、どうかたと存じましたれども、爰許にその時分は禪宗はござらず、聞かうやうもなし。意に思ひますはどうぞしてこの明徳の埒を明けまして、年よつた我母九十十にもしらせて死なせたいこのかなと存じて、身どもが知るよりも先づ年よつた今死するもしらぬ母に知らせたうござつて、爰な講釋、かしの説法があると白せば、そのまゝ走り出て聞て、母のために尊いことを聞きまして、もどりましては又母に云つて聞かせ、母に云つて聞かせますれども、かの

明徳の埒が明きませぬゆゑ、それから思ひよりまして、去る禪宗の和尚に参して、明徳を聞きましてござれば、和尚のおツしやりまするには、明徳が知りたくは坐禪せよ、坐禪すれば明徳が知れるほどにこのことでござつたによりまして、又直に坐禪にとりかゝりまして、そこな山へ入りましては七日も十日も物を不給、こゝな山へ入ては、尖つた岩の上に着物を引きまくつて、直に居しさを岩につけて坐を組むがさいと、命を失ふこともかへり見ませず、自然とこけて落るまで坐を立つともせず、食は誰れかもてきてくれやうはござらず、幾日もそれ故物をたべなんだことが多うござつたれども、只偏に明徳の埒が明けたさに、ひだるいこともかまいません、苦にもなりませなんだ。でもまだ明徳の埒が明きませなんだわい。

(細に禪師の因地の修行を聞くに、大唐の知識にも亦まれなり。



或は五條の橋の下にも乞食四年なり。或る時、同じ乞食の中に一人錢を失ひ、禪師を疑ふてこの道心がぬすんだものであらうと云つて、やにはに半死半生ほどに理不盡に打つ。しかれども禪師いひわけもせず、しらぬかほしてたゞかれてござつたといふ。後にほどなく餘の乞食が盗んだことしれて、そこで又禪師をおがみ、罪を悔ひわびこといふ。すれども禪師はこの時じやと云ても別に悦ぶ事をなさすとぞ。又禪師ある時いはく、人よりいかやうな難題を受けても、手前さへたしかにござれば、自然に事が知れて來てすむものなれば、しゐて此方から云ひわけするに及ばぬものじやとなり。さて又山城の松の尾へ往て拜殿に坐し晝夜脇席につけす臥せずして七日斷食す、社人初めはとがめうたがひ、後には殊勝に思ひ粥など煮てふるやひしと云ふ。

その後禪師瑞世の時、社人もその由を承て見まい申し、禪師も亦使僧を以て禮し玉ふ。又攝州大阪天滿の不動のあたりにも、折々乞食して菰をきて寝てござつた事もありしと云ふ。これはある時自らの咄であつたといふ。天滿寒山寺で仰ある日、玲岩和尚に曰く、身どもが若い時、このあたりに居りました時は、石不動へ曾て參つたことがござらなんだことござつたとなり。或は又數月、川中に立て修行して居ても見たり、或は豊後のあたりにては、癩病の乞食と同食して居てある時は、かつたいと一つに居て、わけをも食ひ、又かつたいへもあたへて、たがひにして日を送り、修行しても見、又は吉野に山居しても見つ。種々様々の方々に在て、人に知れず修行すといふ。委細にその因地の修行實を云はゞ、いひつくしがたし、これ只萬分の一つ



のみ。

夫れよりして故郷へ歸り、庵結び安居、晝夜念佛三昧で居て見た事もござり、色々とあがきて見ましても、かの明徳の埒が明けませんだわい。その如くあまり身命を惜まらず五體をこつかに搦きまして、後には居しきがやぶれまして、坐するに殊の外難義しましたわい。すれども今思ひますれば、其の時はまだ上根にござつた、それで痛みます故しやうことなさに、杉原を一帖ほどづゝ居しきの下に取りかへ敷きまして坐しましたが、その如くして坐しましたれども、中々居しきよりひたもの血が出まして痛みまして坐しにくうござつた所で、綿を敷いて坐することもござつたわいの。何角との数年のつかれが後に一度に出まして大病者になりましたれども、明徳のことがすみませいで、只久しう間、明徳にかゝつて骨折て難義しました

わいの。

師その後。故郷へ歸りて數年閉關するに一丈四方の屋を造り、牢の如くして、椀の入るほど壁に穴を明けて戸の入口も土で塞ぎ出入することなし。食は二時に壁のあけたる所の一尺四方の丸き穴より入る、食事畢れば、又椀を穴より出し、大便利は外の廁へ内よりとゝなるやうに拵へ、おくなり。扱て右のつとめは此の内の受と云ふなり、或る時壁の内の端に何やら反古がちら／＼してあつたれども、それも氣がつかずに居たが禪師のそれを取て見やれとあるゆゑ、取て見れば、十日も二十日も後の事が來らぬことが書きつけて、そんじよそよ幾日の日は、どこから何を來るの、或は伊豫から使者が、いくかの日はくるが、何の用で來ると云ふことが心覺にあるに、一度も違はず、



いづれ不思議なことであつたと隨侍の人へのはなしなり。

それから病氣が段々とおもひまして身がよわつて、後には痰を吐き  
ますれば親指の頭ほどな血痰がかたまりまして、ころりくとまん  
丸になつて出ましたわいの。或る時、痰を壁へ吐きかけて見ました  
れば、ころりとこけて落ちるほどのこととござつたわい。その時みな  
白すは、それではなるまいほどに、庵居して養生せいといふにつけ  
まして皆の者にまかせて庵居して僕一人つかつて煩て居りましたが、  
やうく病がつまりました、ひつしりと七日はども食が止りて、重  
湯より外のは、咽へ通りませいで、それ故にもはや死る覺悟で  
居まして、その時思ひますは、はれやれ是非もない、別に残り多い  
ことはなければども、只平生願望明徳がすまずして死る成就せずして死  
ることかなとばかり思ふて居りました折ふし伎倆消盡處。風入鏡筒技已窮。又風入牛角始見倒斷處。

ひとつと一切のことが不生で調ふものを、さて今迄知らいでむだ骨を  
つたことかなと思ひつきました、やうくと従前の非を知つたこと  
とござつたわいの。禪然して法それからして氣もはつきりします  
る。悦ばしうござつて食さげんが出来て來ました程に、僕を呼びま  
して粥を食ふほどにこしらへよと白したれば、今迄死にかゝつて居  
た身どもが不思議なことを云ふよと僕も思ひました、さうにござつ  
たか、然れどもいかう悦びまして、さてもうれしやと白して、其の  
儘いそぎふためき粥をこしらへ養て、僕も少しなりとも早くくはさ  
うと致して、ろくにまだ養もせぬほどにぼてつく粥をくはせました  
が、それでもかまはずに三盃先づたべたれども、あたりもいたさず、  
それより結句段々に日増に快氣しまして、今日までながらへ居ます  
こととござるわい。したが、終には願成就しまして、母にも辨へさ



せて死せましたわいの。不生で一切事が調ふことが辨へましてから、天下に身ともが三寸の舌頭にかゝる者がござらなんだわいの。その前身ども如くにその儘云つて聞かせませうなら、これほどには骨折りはしますまいが、その時分は、知つた者がなさに云ふて聞かせませいで、久しうむだ骨折て思ふやうに皆の衆へ十分に出てえ逢ひませぬわいの。

# 禪學無一物修行 終

明治三十五年九月十五日印刷

明治三十五年九月十八日發行

禪學無一物修行  
定價二十錢

著 者 森 脇 星 江

發 行 者 岩 崎 鐵 次 郎

印 刷 者 日 置 市 二

印 刷 所 小 川 印 刷 所

東京市神田區鍛冶町十七番地  
東京市神田區錦町三丁目一番地  
東京市神田區錦町三丁目一番地



發 兌 大 學 館

東京市神田區鍛冶町十七番地  
電話本局三〇六七番



村上濁浪君著

### 冒險旅行術

正價廿五錢 郵税四錢

生と賭し、死を決し高岳に溪谷に深林に沙漠に

七寸の草鞋を踏破して奇勝を探り、險難

を冒す、勇氣凜然、剛膽烈々、日

て爲すべき處なり。

本書は**世界各國に於ける**

冒險者が熱帯寒帯、北極南極、津烟毒霧

の地、**猛獸怪鳥**の巷を跋渉した

る、**且準備方法**必須の條件を明細に詳悉せり。

鐵脚子著 岡落葉君畫

### 野宿旅行

正價廿五錢 郵税四錢

三個の風流、菅笠に**薦一枚**脚

に草鞋の扮装、先づ行人を驚し、漂々

乎として東都を出て汽車の便を藉らず、

囊中の空乏元よ**青天井に草**

枕、胸羅盤張り上げて蚊**一瓶の**

正宗に野宿して旅の耻は捨捨ての

奇談珍話、地腹絶倒すべき滑稽

消夏の好伴侶なり！



木村鷹太郎君著

肖像寫  
入  
真數葉

# バイ文界之大魔王

正價四十錢 郵税四錢

- 第一編 英國に於ける詩人バイロン  
バイロンの遺傳及其幼時  
ケンブリッヂに於けるバイロン  
「バイロン」ハロルドの旅行  
結婚、離婚、婦人の關係、英國決別
- 第二編 外國に於けるバイロン  
瑞西及エチオピアに於けるバイロン  
ラズンナに於けるバイロン  
ヒサ及セノアに於けるバイロン
- 第三編 バイロンの思想、文學、哲學  
天地觀及自我論  
不平及厭世  
人道と耶穌教との衝突  
快樂主義  
女性及愛戀觀  
道徳觀  
海賊及びサタン主義
- 第四編 英雄バイロン  
バイロンの秘密政黨及グレンナの獨立戰爭

平野紫陽君著 岡落葉君

# 文學奇瑞譚

正價廿五錢 郵税四錢

- 第一編 雨を祈り又雨を止めたる事  
疾病を癒せしめし事  
禽獸を感せしめし事
- 第二編 神人唱和  
神人を感動せしめし事  
不吉を變じて人の心を安からしめし事
- 第三編 罪禍を脱れ又罪禍を招きし事  
人に侮られず且つ品位を高めし事  
望を達する事  
名號を得たる事  
恩賜に預たる事  
位階を得たる事  
他人の詩歌を應用する事
- 第四編  
第五編  
第六編  
第七編  
第八編  
第九編  
第十編  
第十一編  
第十二編  
第十三編

墨堤隱士著 肖像寫眞版入

# 大臣の書生時代

正價三十錢 郵税四錢

大禮服に勳章を帯びたる現  
在はいざ知ら  
ず短褐弊衣の腕白時代には、奇  
々妙々の珍談山の如  
く流るる宰相だけあつて、  
石に未來の宰相滑稽の中に學  
ぶべき處あり、亂暴の中に、膽氣愛すべ  
き處あり、管にて趣味の湧然  
たるを讀めば、立志の覺悟に  
なるを覺ゆるのみならず、  
無比の興奮たる好個の讀物  
なり!

墨堤隱士著 肖像寫眞版入

# 日本富豪の家憲

正價三十錢 郵税四錢

- 三井家の家憲  
本間家の家憲  
松屋呉服店の家憲  
岩崎家の家憲  
大丸の家憲  
住友家の家憲  
中澤家の家憲  
安田家の家憲  
山本家の家憲  
澁澤家の家憲  
升本家の家憲  
白木屋呉服店の家憲  
鳩池家の家憲  
菊池家の家憲



(前付の四)

原田東風君著 岡落葉君畫

### 奇談 貧乏旅行

正價二十五錢 郵税四錢

貧乏旅行は即ち貧乏人の旅行、已に貧乏人なり、囊中は乏し、空乏なる囊中を以て長途の旅行を、野宿は論の事、飢餓は覺悟の前、進めば愈々究し、智慧生じ、勇氣於てか、失策り、意外の歓迎となり奇談百一讀妙味云ふ可からず。

村上濁浪君編 寫眞版數葉入

### 世界第一譚

正價二十五錢 郵税四錢

世界第一瀑布の探險  
世界三大不思議  
世界第一金剛石の來歴  
長壽者誌  
世界第一英雄、シーザー  
古今大物盛  
奈良大佛世界漫遊記  
萬國珍物博覽會  
世界第一義士墓と遺物  
赤穂義士の逸話  
世界一の力持と鬚男  
世界第一烈女ジャンダー  
世界名物膝栗毛  
世界第一の名劍  
人類學上の世界第一

木村鷹太郎君著

### 孔子 荀子 人物養成譯

價參格錢 郵税四錢

#### ●學生机上の良書!

孔子、孟子、荀子の傳記、主観、理想、訓言、著書、弟子養成の手腕悉く叙説評語す。

性善説、性惡説、孟荀兩家が根本より見解を別にして、各滔々數萬言となる其間の活動面目は、一讀せざる可からざるの點

#### ●教師心携の寶典!

墨堤隱士著

### 博士苦學談

價二十五錢

徒らに陳腐の倫理道德に依つて情熱炎々たる青年を馴致せんとす迂愚も亦甚しかな

敢て本書を出版して、文學、法學、工學、醫學、農學、理學、林學の諸博士數十人が

青年時代の苦學談を青年諸氏に示すもの豈他あらんや、

向上の精神に富み希望の光を望み成効に餘念なき青年諸氏は本書を讀んで益々三省發奮せざんば已まざらん。

(前付の五)



早田玄洞君著 岡落葉君畫

### 鍊膽夜間遠足

價貳拾錢 郵稅四錢

夜間遠足の利益左の如し

一 夜間の旅行は最も費用を節約し得  
二 夜間の旅行は避暑の目的に適合す  
三 夜間の旅行は心勝修練に益あり  
夜間遠足か如何に奇談珍話  
に富むか左の目次の概略を一覽せよ

- 怪しの女
- 泥棒々々
- 英雄の跡
- 犯罪の嫌疑
- 拘留
- 拘摸捕縛
- 大の襲撃
- 乞食問答
- 夜の富士
- 暗闇
- 無一物
- 圖らぬ馳走

河村北溟君著

### 深山仙術修行奇談

價廿五錢 郵稅二錢

深山の絶頂に登て 天界の諸星  
の機密を探り、幽谷に下つて、**狐狸**  
と談じ深林に入つて、**山猿**と戯れ、  
果實を食ひ清泉を掬し、樹下石上に**座**  
**禪の工夫**を凝し、頭髮髦々とし  
て、五臓腑の如く疲せ、始めて**神通**  
**自在妙不可思議**の術を得  
たりと稱す、偽か真か試みに一讀して、  
**仙術の妙**を探究せよ

柴田流星君著 岡落葉君畫

### 海之冒險奇談

價廿五錢 郵稅四錢

英國の少年**冒險小説**と讀む而も  
年は好て**冒險小説**と讀む而も  
るは海に關するものなり、英吉利本國の  
人士が四**太陽**と見ざるな  
六時中と誇るに  
しと誇るに

本書は日本男**海之事業**と可  
兒が成せる**海之事業**と可  
親切に、正直に**金華山沖**に暴  
述べたるもの、**郡司大尉**と露  
と戦ひ、**郡司大尉**と露  
占守島に**郡司大尉**と露  
領**コマンンドルヌキ**！  
島に萬歳を唱ふる**海國男兒**の  
伴侶！  
まで痛快壯絶

森脇星江君著

### 禪學無一物修行

價二十錢 郵稅四錢

禪學の奥儀は深遠にして容易  
幾千**彷徨躊躇**迷はざるものなし  
條千**彷徨躊躇**迷はざるものなし  
本家と捨て、**妻子**と捨て、  
俗念を絶、**塵慾**を脱離し、**無の**  
**意義**を悟らんとしたる**自叙體**  
に記したるもの、唯に禪學に志すもの、  
みならず、**無比**の  
問に志すもの、**無比**の  
鉄鞭り、**膽力養成**の珍書な







# 豪傑叢談

正 冊拾部全 美 本  
 拾 冊拾部全 美 本  
 五 冊拾部全 美 本  
 錢 稅 錢 貳

第 壹 編 宮崎來城君著  
**多情の豪傑**

第 貳 編 宮崎來城君著  
**豪傑の臨終**

第 參 編 宮崎來城君著  
**豪傑の少時**

第 四 編 岩井松風軒著  
**豪傑の遺訓**

第 五 編 宮崎來城君著  
**豪傑の雅量**

目次左の如し  
 ○源朝朝○源義経○平重盛○木曾義仲○曾我  
 祐成○楠正行○藤原藤房○高師直○尊良親王  
 ○高師秋○新田義貞○新田義興○平通盛○柴  
 田勝家○平維盛○豊臣秀吉

豪傑の氣象は臨終の間に於てこれを見る、來  
 城子嗣の儲備を授けて無難の古豪傑が臨終  
 を描く一讀物夫も起つ可く鬼神も泣くべし  
 蛇は三寸にして人を呑むの概あり、豪傑の豪  
 傑たるはそれ天品に依るか又聞く大器晩成の  
 語あり豪傑の豪傑たるはそれ鍛練に依るかこ  
 れを知らんと欲せば須らく豪傑か少年時代の  
 言語學止に盡せよ  
 創業は易し守成は難し、英雄の苦心はその子  
 孫の業に在り、遺訓を遵守するもの以て榮へ  
 背反するもの衰ふるは歴史に徴して明なり、  
 有爲の青年なるもの一冊を座右に置いて朝々  
 の鑑とすべし  
 賭豪傑が亂世に於ける慣用手段たる權謀術數  
 以外に一種の天真瀟灑なる態度を以て人を迎  
 へたる絶好の逸話、茲に例の健筆を以て寫し  
 出されたるもの一讀光風霽月の想あらん

# 豪傑叢談

正 冊拾部全 美 本  
 拾 冊拾部全 美 本  
 五 冊拾部全 美 本  
 錢 稅 錢 貳

第 六 編 西山筑濱君著  
**豪傑の交際**

第 七 編 岩井松風軒著  
**豪傑の信仰**

第 八 編 西山筑濱君著  
**豪傑の修養**

第 九 編 宮崎來城君著  
**續多情の豪傑**

第 拾 編 西山筑濱君著  
**豪傑と奥方**

實際は即ち處世法なり交際に拙なる者は世に  
 運るもは自然の數なり、異色異種の人物交々  
 來り接す此間に處して如何に談話し如何に待  
 遇すべきや豪傑が苦心また甚だしきものあり  
 此書これを讀いて些の餘蘊を見す  
 英雄豪傑の壯業偉蹟は實に謂れが信仰の産物  
 なり、神か、佛か、人か、物か、道か、理か、物  
 か、其等は其の一の或ものを崇拜して志を成  
 したるものなり本書詳に之を論ぶ  
 大事業の下には大なる準備あり偉人の案には  
 大なる修養あり修養は活動の第一義なるの語  
 を知る者須らく此書に就て如何に英雄豪傑が  
 その修養に力むるに困苦勸勵せしかを見よ  
 蓋に、多情の豪傑一編を著して滿天下の耳目  
 を驚倒したる著者更に其洩れたる戦國の勇將  
 猛士が情事に寫す魂存優艶の筆致は脱くを川  
 舟す讀む者恍惚として自失せずんば幸のみ  
 豪傑を知らんとするには先づ夫人の研究を要  
 す、女子か男子に及ぼす勢力等大なるものあ  
 りればなり、此書或は叙説し或は評論し俊麗と  
 佳人双々點綴する處一部小説を讀むの感あり















池田錦水君著 岡落葉君畫

# 戀の一年有半

版再 價廿五錢 郵稅四錢

戀愛は青年の花なり、戀愛を一概に排斥する者は未だ  
以て人世を語る可からず、戀愛は人生の慰藉なり、花  
は人生の楽しみなり、一年有半に於ける多量の戀愛  
を究らんと欲せば、本年これを容易に説明す。

池田錦水君著

# 婦人と戀愛

版三 價廿錢 郵稅四錢

婦人の通有性人生と戀愛の發動一時的戀愛虛構的戀愛  
若し外的戀愛令夫人の戀愛の發動の機を誘ふれば、  
戀の起るは、戀の起るは、戀の起るは、戀の起るは、

池田錦水君著 小山榮達君畫

# 奥様と嬢様

價廿五錢 郵稅四錢

奥様とは如何に経歴技能理想品性嗜好娛樂滑稽動作  
習俗社交奥様に寄る嬢様とは如何に世間的智識學的智  
識藝術的智識希望嗜好遊戯學止言語交際將來嬢様に寄

池田錦水君著

# 女心の解剖

版再 價參拾錢 郵稅四錢

(容貌)美人、十人並、醜婦(年配)老婆、年増、新造、少女、  
(風土)關西、關東、關西、關東、關西、關東、關西、關東、  
人、田園婦人(職業)女教師、女醫師、女舞臺、女歌、  
女役者、嬢様、女主人、女教師、女醫師、女舞臺、女歌、  
女役者、嬢様、女主人、女教師、女醫師、女舞臺、女歌、

池田錦水君著 岡落葉君畫

# 無錢修學

價廿五錢 郵稅四錢

本書の目的は青年が苦學力行を奨励するに在り、困窮  
姑息の念を除去するに在り、自立自活の法を教ふるに  
在り、目次を分つ事第二、新開社生活、第二の東京、前  
在り、貧家と成り、托鉢坊主となり、車夫となり、種々苦  
心困難の境遇を小説的に描き出す、附録として、別に學  
生自活法を添へたり。

原田東風君著 岡落葉君畫

# 暗黒の青年時代

價廿五錢 郵稅四錢

余が郷、余が家の歴史、境遇及び幼時、亂暴時代、自活、  
出奔、苦學、學校時代、東京、第二の若學、官立、失敗、  
落着、郷里の變遷、新聞社生活、第二の東京、前  
光明を認め、一道の話を求めんとする青年は本書を讀  
んで準備警戒せざる可からず。

井上啞々君著 岡落葉君畫

# 遊學書生

價廿五錢 郵稅四錢

本書は無邪氣無垢の青年が東都に遊學して周囲の惡風  
的に誘惑に乘り、不識不知墮落する傾向を小説的寫實  
的に描きたるもの、皮肉文字は如何に讀者をして印象深  
かり、著者得意の皮肉文字は如何に讀者をして印象深  
かり、著者得意の皮肉文字は如何に讀者をして印象深

原田東風君著 小山榮達君畫

# 木賃宿

版再 價廿五錢 郵稅四錢

社會の暗面を知らんと欲せば、先づ下層の生活を研究す  
べし、下層の生活を知らんと欲せば、先づ下層の生活を研究す  
べし、下層の生活を知らんと欲せば、先づ下層の生活を研究す  
べし、下層の生活を知らんと欲せば、先づ下層の生活を研究す

蛟龍子編

# 東京學校案内

價廿五錢 郵稅四錢

東都に遊學する青年男女の爲め、東都百三十餘校の精在  
地、入學規則、修業年限、卒業後の資格、試験科目、課目、  
費用等、凡て最近の調査に依りて編成したるもの、記事は  
綿密にして正確なるは、編者の責任を帯ぶる所なり。

矢野滄浪君著 岡落葉君畫

# 食客

版再 價廿錢 郵稅四錢

本書は著者が實踐せし事柄を言文一致を以て描かれた  
るものにして、食客が辛酸困苦の境遇を起さしむる生活  
むものにして、食客が辛酸困苦の境遇を起さしむる生活  
むものにして、食客が辛酸困苦の境遇を起さしむる生活  
むものにして、食客が辛酸困苦の境遇を起さしむる生活



早田玄洞君著 肖像人

# 李鴻章

價廿錢  
郵稅四錢

森脇星江君著

# 禪學無一物修行

價廿五錢  
郵稅四錢

早田玄洞君著 岡落葉君書

# 膽力修行

價廿五錢  
郵稅四錢

平野紫陽君著 岡落葉君著

# 文學奇瑞譚

價廿五錢  
郵稅四錢

與謝野礫幹君著

# 新派和歌大要

價廿五錢  
郵稅四錢

東洋の風雲は公の一人の手に依て變幻出沒の感あり  
所以等而比公と相並んで世界の三大傑と稱せられし  
は抑も英雄を悼惜するの道あらんや本書は彼れが年  
時代よりその終焉に至る迄の行動を叙し逸話聞悉く  
輯めて漏す所なし又以て東洋史の一部を補ふに足る  
禪學の奥義は深遠にして容易に解すべからず、恰も山  
に登るが如し羊腸たる險路幾千條、孰れが正か否かを  
解するに苦しみ彷徨躊躇して落日黃昏よく迷はざる  
ものなし、本書は妻子を捨て家を捨て俗念を絶ち修  
行を自叙體に記したるもの唯に禪學に志すもの多し  
らす荷し、力業成には好讀本なり、  
曰く、古寺曰く人魂、曰く化地蔵、曰く古刹、曰く雨  
夜の怪談、曰く丑の刻、曰く古城の櫓、曰く巖谷の一夜、  
曰く食人怪、曰く死人の番、曰く青面鬼、項目の奇々怪  
々一讀して粟肌に生さる思あり、記事頗る荒誕にして  
夫を載せたり、實蹟に非ざるはなし、附録として坐禪工

本書は古來歴史上に於ける和歌俳句等が人情を和らげ  
鬼神を泣かしめ妖怪を退治したる奇跡の逸話を集め  
るものにして消閑の具には無比の好著たるのみならず  
また得易からざる参考書なり  
與謝野礫幹君が初學者の爲めに多年説話評論註釋せら  
れたる凡て新派和歌に關する逸話を蒐めたるもの就中  
新派の起原新詩新體新詩集の如きは歌壇の珍、他に見  
る可からざるものなり新派和歌に志す士は是非一本を  
購うて可なり、

生田葵山人著 アートベーパー美術書挿入

# 貴族の戀

價廿八錢  
郵稅四錢

巖谷漣山人序 生田葵山人著

# 少英雄

價廿五錢  
郵稅四錢

巖谷漣山人序 生田葵山人著

# 進撃隊

價廿五錢  
郵稅四錢

押川浪春君著 寫真版挿入

# 航海奇譚

正價廿五  
郵稅四錢

柴田流星君著 寫真版挿入

# 海之冒險

價廿五錢  
郵稅四錢

貴族の戀の一篇は新作家中後評の譽ある生田葵山人が  
近時の傑作なり、於ける痴男痴女の戀は已に上流貴  
族社會に於ける戀愛の嚮ふべきの感あり、  
たるものを見ず、妙齡にして顔玉の如く令嬢が功名に  
えたる紳士と戀愛に關する紳士とを機手に諷刺する  
本編中の骨子なりとす、  
葵山人が少年小説に巧手なるは、今更喋々を要せざる  
處、少年士官、踊靴、米利加行、黄金の犬、適切な香  
人、狐の踊、母の眼、海軍の少年の數篇を輯む、  
海賊の通譯、支那の少年、蝶の舞、火中の鏡、笛吹娘  
めなこれ少年少女諸君の愛讀するべきもの、無邪  
氣の中に教訓あり、天真爛漫なる中に萬夫も動かし  
からざる勇氣あり、趣味洋洋々として家庭教育には必須  
の良書なり、  
大洋と冒ふ已に快也、航海と言ふ已に壯也、奇譚といふ  
に至つては、就て讀まざる能はず、太平洋を渡る船、太  
西洋に沈む船、甲板に起りたる神鬼出沒の活劇、奇絶に  
して趣味多く快絶にして感興甚だし、  
目一士官、無名の碑、俠血勇兒、二人胡弓、  
英國の少年は好て冒險小説を讀む、而もその重なるは  
海に關するものなり、英吉利本國の人々が四六時中日を  
見させる所は、奇事に至る亦宜し、海之冒險は漸の日木人  
命、山沖に暴風と戦ひ、占守島に親切に直正に述べたるもの  
マンドルスキ島に萬歳を唱ふるが如き、何如の快事ぞ  
海國の男兒は敵なき海に死せざる也、







文學士白河鯉洋君序 宮崎來城君著

# 楊 貴 妃

版五 價廿參錢 郵稅四錢

帝國大學教授内藤耻叟先生序

黒河内與四郎君著

# 靜 御 前

版四 價參拾錢 郵稅四錢

文學博士三宅雪嶺先生序

岩井松風軒君著

# 小 野 小 町

版參 價廿五錢 郵稅四錢

宮崎來城君著

# 國色史叢 第壹編 虞 美 人

價廿五錢 郵稅四錢

宮崎來城君著

# 國色史叢 第貳編 西 施

價廿五錢 郵稅四錢

著者風に漢文學に精通し清國に歴遊して人間未見の書に涉獵すること多年其瑰奇無双の筆を以て天下無双の同色を描く材料斬新にして麗麗の絶話驚異して漏すなし一讀するも其の真は二千年前に生れ面前貴妃か美貌に接し媚首を耳にするの感あらん

帝國大學國史科に於て、鎌倉時代國史を專攻せし著者が數十の奇書珍本を材料とし其傳なる學識と流麗なるが筆に依りて靜御前が幼時より其最期に至る迄極めて正確に物せられたるもの殊に其義經との關係の如きは最も詳細を極むる坊間散漫杜撰の詳傳とは同一の映に在らざるなり

極美の女流として、非凡の歌仙としての小野小町が九十二年間の生涯の榮枯盛衰を叙したるもの材料は正當富文章は流麗暢達、從來不可思議の裡に疑念を留めし小町の事蹟は此書に依りて始めて明瞭に解決せられたり

# 文學士辰巳小次郎序 岩井松風軒君著 淀君と太閤

版四 價廿八錢 郵稅四錢

本田種竹君序 長田偶得君著

# 維新豪傑の情事

版三 價廿五錢 郵稅四錢

渡邊修二郎君著

# 大久保利通の一生

版再 價參拾錢 郵稅四錢

文學士飯田吹萬君序 帝國大學侯野節村君著

# 偉人の言行

版再 價廿五錢 郵稅四錢

渡邊修二郎君著

# 青年と立身出世

版再 價貳拾錢 郵稅四錢

瀟灑行の徒妄りに英雄の皮相を學んで精神を解せず天下酒々として文弱優柔の弊に陥る、松軒于此に感ずて此書を著り、先づ華を英雄好色論にして萬流の吐き絶えり、英傑太閤の如きも淀君の色に溺れて六十餘州の權一夢の中に奪はる、慘劇を叙すこの段極めて痛快一讀案を打て絶叫すべし、

醉うては枕す、美人の膝、醒めては握る天下の權、千軍萬馬九死の間に於て、猶且つ優々餘裕ある英雄が風流韻事閑月の逸興を寫すに楚々たる筆致を以てす、

野利秋○高山止之○梅田○梁川星○坂本龍馬○桐田節○西郷隆盛○佐久間隆山○薄井小蘆○種田政明○森田節齋

維新豪傑大久保利通及び其時代の史傳は即ち維新政變の記事なり、維新政變の記事は實に近世歴史中の精華にして、頗る興味に富み、最も考究の要あるものなり、著者今此傳を草して薩長傑士と近代國事との關係を詳に併せて、明治政府の由来を觀察するに最も精密國史に志するもの一本を購って可なり

日本歴代無慮數百名の偉人が品操、氣韻、深慮、胸襟、修養、洒落、雅量等各方面に涉りて特出し後世の模範となる可き其平生と其面の性行を寫す有爲の青年が以て志氣を養ふの好伴侶たるに適す

立身成功の事偶然之を求む可からず然らば其如何なり、唯健康、教育、實驗の三者と百折不撓の精神と是れなり、今これの道を目に分つ事二十箇條叙す、切實切實、青年成功の道なれば、兼りて、失敗の因を教ふ附録には、今世人士の生年表、著大學生特許三書表、各藩貢進生表の三篇を添へたり、實に机上の好裝飾なり、



文學士梶川鳥城君序 林稻洲君著  
**婦理想の良人**  
價十七錢  
郵税二錢

文學士辰巳小次郎君序 岩井松風軒君著  
**遊仙窟評釋**  
版四 價廿五錢  
郵税四錢

信夫恕軒翁序 岩井松風軒君著  
**長恨歌評釋**  
版三 價十三錢  
郵税二錢

宮崎來城君序 吉田谿南君著  
唐代**美人傳評釋**  
名著作 價廿五錢  
郵税四錢

白樂天作 **琵琶行評釋**  
傑作 價廿五錢  
郵税四錢

宮崎來城君序 金田雪窓君著

**女流の偉人**  
版四 價廿五錢  
郵税四錢

此書は未婚の男女兒を持てる父母兄弟姉の一説を要す未  
に親切なる勸告と撰法を説く此書を読みたる女子の爲め  
妻を離別するの不幸なく難縁せざるを謀むるに於ては  
べし要するに此書は未婚の男女に於ては必す之を讀むべし  
り既婚の婦人に向て絶好の忠告なり  
遊仙窟は唐の文張威が仙女に託し、戀愛の眞想を叙述  
したるものにして、草の體麗巧妙なるものと空前絶後と稱  
せらるる我國には十有餘年前學士伊時なるものと嵯峨天皇  
の命を奉り、靈窟の膝下に讀んで訓點を受たりと傳へ馬琴  
等か、色人品人情を叙するに當り此書に範る所共多  
し古來文學士の愛讀せしこと以て知る可し本書訓點多  
解の三點に分ち最も平易の語句を用ゐ通俗的に評し  
たるものなり  
長恨歌は唐の文豪白樂天の傑作也○全篇百二十句の長  
詩也○玄宗皇帝好色の頽末也○美人楊貴妃の一代記也  
○色慾修善を戒むるの文也○文章優麗巧妙絶倫也○作  
詩作文の模範資料也○青年學生座右の珍寶也  
本書は驚々傳へ、或書柳傳揚如傳並に琵琶行を訓釋、釋義  
解して分ち易く通俗に解釋せるものなり來城氏本書に  
序して曰く方今文學士の漢詩漢文を讀むもの多きは六家  
八家の門扉を窺ふの外、復た片眼の塵に染るるなし之  
を窺むるは道種の外、復た片眼の塵に染るるなし之  
別様の文情を知らしむに在りと  
本書編輯せる所一切我邦の國權才女に係り、毫も異邦  
の人物を加へず、これ我邦には我邦の奇情あり、特色あり  
り、神韻あり、精華ある所以にして或は總行を以て著し  
れ、才子を以て飾れる必ずしも一定せず、而して書中時  
に校書如婦を挿記するは砂裏の黄金泥中の蓮花なきに  
非ざるを以て、苟くも世の婦人眞婦賢母となる志  
あらば必ず一本を備へざる可からず

岩井松風軒君著

**情の清盛**  
價廿八錢  
郵税四錢

公爵近衛篤磨君序 島田三郎君序 法學士桑田熊三郎君序 法學士中村進午君序  
柳瀨勁助君遺著

社會外穢**多非人**  
版三 價廿五錢  
郵税四錢

渡邊修二郎君著

**奇傑雲井龍雄**  
版三 價貳拾錢  
郵税四錢

渡邊修二郎君著

**俠傑高田屋嘉兵衛**  
版三 價貳拾錢  
郵税四錢

國府犀東君序 香川怪庵君述

**文士政客風聞錄**  
版三 價拾五錢  
郵税貳錢

人間を觀察するに最も趣味あるものは、是れ情也日本  
史上の一名物、平相國を見るに此一面より、何ぞ折花  
の逸樂と言はんや、何ぞ樂柳の戲典と言はんや、若  
が暢達なる筆は此一怪傑に生命を興へて如何に能く百  
花の爛漫たる春光を此書の表に現出せしめんとするぞ  
全力を盡くし穢多非人の生活、信仰、道徳、婚姻、職業、  
交際、起源、人口繁殖、沿革、過去、將來、救濟法を研究  
し、其結果を公表するに至らずして遠逝せられし柳瀨  
勁助氏の遺著にして、別天地たる該社會の奇習一として  
洩らすことなし  
渾身奇蹟、奇行、奇行、渺たる一青年の身を以て捷手破天  
驚地の壯學を試み、終に奇蹟を得て刑場一片の露と消  
へたる明治初年の快男子雲井龍雄が幼時より其斬首に  
至る間の性行、奇事を編めて一編の傳となしたるもの  
附録雲井龍雄詩文を掲ぐ  
嘉兵衛は市井の一夫のみ、而して國家の爲に、性  
なりて海外に執はれ、毫も國譽を辱しめず一縷千鈞の懸  
關に處して彼我の間に事情を疎通し、竟に平和に事功を  
結了するを得たり嗚呼、吾輩を傳せざる可けんや著者國日  
麗人の記録等を得て材料頗る豊富なり、日露交渉の事  
蹟は其多趣多味なること遙に小説神史の上に在り  
方今其名噴々たる政治家、文豪が奇話珍聞を蒐めたる  
もの、滑稽あり、洒落あり、豪放あり、奇矯あり、風  
流あり、慷慨あり、面目躍如として紙上に活躍す、



博言博士イーストレーキ君著

英作文添削詳解

再版 價廿參錢 郵稅貳錢  
「イ」氏門生の英作文數多を撰擇して、字々句々に精密の添削を加へ、其全又には全體の評論を下し、以て英作文練習の方針を示し、邦文を以て添削評論の理由を詳説したる英學界未曾有の珍書なり。

博言博士イーストレーキ君著

英和通辯 日用單話自在

三版 價參拾錢 郵稅四錢  
英米日用の慣用語句一千數百を集めて之を二十種に類別し同氏自ら正確の發音を加ふるに末尾に單語數百をも類別に附しめれば初學者は勿論特に中學生庶右必須の良書なるべし。

菅野德助君著

フランクリン 自叙傳詳解

再版 價參拾錢 郵稅四錢  
國民英學會講師として「實用英語」記者として英文の註釋を以て芳名噴々たる菅野氏が其精板なる頭腦により詳密の註解を下せしものなれば坊間流布の蕪雜の書と其の選を異にするは勿論實に中學生必携の書。

文學士宮本正賢君序 虎城山人編

作文必携 助字用法詳解

四版 價拾五錢 郵稅貳錢  
●也、矣、焉、乎、哉、耶、耳、爾、已、哈、哉、差、夫、抑、之、乃、彼、即、便、宿、尙、仍、等、助、字、數、百を類集し、各字の意義、用法、異同等皆實例を擧て詳説せり。

侯爵西園寺公望君題字 岡鹿門君序 財間榮君編

作文必携 熟語成句詳解

六版 價廿五錢 郵稅四錢  
故事熟語數千を集めて、之を精密の意義、文字の出發、故事來歴を詳説して、之を「是」別に區別し、尙ほ索引に便なる爲め種類目錄をも付しめれば引用に便にして、文藝に従事せるもの座右必須の要典なり。

文學士宮本正賢君序 虎城山人編

速成和文漢譯秘訣

價拾五錢 郵稅貳錢  
和語を漢語の語勢に變更する練習法なり復文十數例を擧げて實字、助字の用法及語句の轉例を一字一字詳説し又和文の異同を識別し譯文の運用變代を會得せしむる爲め同一文を數種に漢譯したる名家の和文漢譯例を示し譯文の方法秘訣を詳説せり。

法學士加藤正雄君序 南海道人編 (挿書三拾二個)

書法秘訣 習字速成圖解

三版 價拾五錢 郵稅四錢  
本書は永字八法、草字筆法、一文字五形修練術、忍返し筆法、就法法等を總て圖を以て詳説し、其他執筆運筆姿勢、書體、四修、習情、文學之體、筆勢、筆拍子、去欣、墨色、生字、死字、病字等、秘訣、腕大祖、王羲之、晉成帝、柳公權、東坡等の書法極意より書林の種種、筆道の用具に到るまで詳細不漏。

緒方流水君序 石橋玄潮君著

新體詩指南

再版 價廿五錢 郵稅四錢  
新體詩の性質を明にし、其作法を詳説し、附するに之が模範たる作例と、之を組織すべき資料たる類語を蒐集したるもの、新體詩自修の指南は本書を捨て何れに之を求めん。

石橋玄潮君編

韻文 花天月地

再版 價廿五錢 郵稅四錢  
本書收むる所は、當時有名の新體詩人の作にして其筆を按き其情を運びて之を集む、其數七十有餘、題當に是れ四時、花鳥風月の友天地の有情を教ふるものは即ち之なり。

文學士栗田木岡君序 渡邊幾石君編

美文資料 美辭麗句

三版 價廿錢 郵稅四錢  
本書は部門を季候(春、夏、秋、冬)、地理、天文、人品、品性、人情及人事等に分類し、更に百有餘の細目に分ち以て索引の便を計り、益し作文の好資料にして苟しくも文筆を弄するの士が座右の友として裨益少なからざるを信ず。

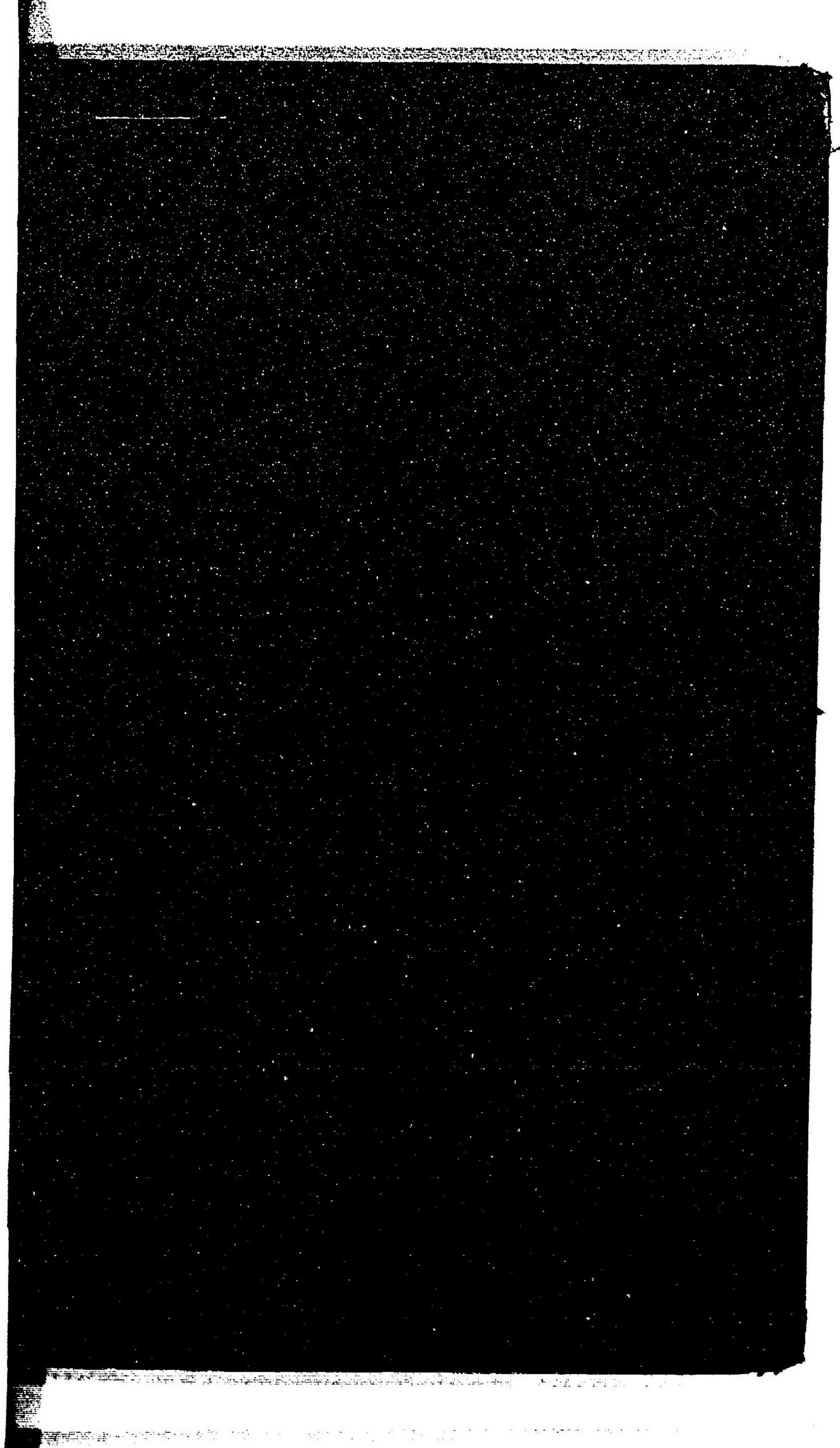






76
54







019612-000-0

96-54

禅学无一物修行

森脇 星江/著

M35.9

ABG-0392





